

JR山陰本線・私鉄一畠電鉄
連続立体交差事業地内

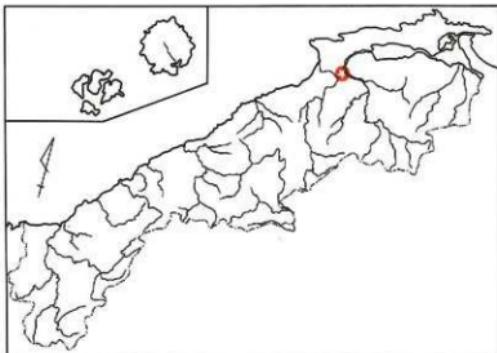
藤ヶ森遺跡（I地点・II地点）発掘調査報告書

1998年3月

島根県出雲土木建築事務所
出 雲 市 教 育 委 員 会

J R 山陰本線・私鉄一畑電鉄連続立体交差事業地内

藤ヶ森遺跡（I 地点・II 地点）発掘調査報告書



藤ヶ森遺跡位置図

1998年3月

島根県出雲土木建築事務所
出 雲 市 教 育 委 員 会

はじめに

出雲市教育委員会では、平成7年度に出雲土木建築事務所の委託を受け、JR山陰本線・私鉄一畠電鉄連続立体交差事業地内に所在する藤ヶ森遺跡（I地点・II地点）の発掘調査を実施しました。

当地はこれまで遺跡としては確認されていなかった地域でしたが、I地点においては平安期の遺構・遺物を多く検出し、II地点では、弥生時代の遺物を中心検出することができました。

これらの資料は、今まで不明の点が多かった出雲市街地について貴重な資料になるものと思われます。本書はその報告書ですが、出雲平野の歴史解明に多少なりとも役立てば幸いに存じます。

最後に、調査にあたり、ご協力いただきました出雲土木建築事務所、JR出雲鉄道部、JR出雲工事事務所をはじめ、関係各位に衷心より御礼申し上げます。

平成10年3月

出雲市教育委員会

教育長 多久 博

例　　言

1. 本書は、出雲土木建築事務所の委託を受け、出雲市教育委員会が平成7年度に実施した藤ヶ森遺跡（I地点・II地点）発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査は、下記の期間において実施した。

平成7年（1995）7月5日～同年10月24日

3. 発掘調査を行った地番は、次の通りである。

出雲市今市町藤ヶ森980-2番地ほか

4. 調査は、次の組織で行った。

平成7年度

〔調査指導者〕 岩橋 孝典（島根県教育委員会文化課主事）

〔事務局〕 野津 建一（文化・スポーツ課長）、新宮 雅子（同 課長補佐）

〔調査員〕 岸 道三（文化・スポーツ課主事）

平成8年度

〔調査指導者〕 岩橋 孝典（島根県教育委員会埋蔵文化財課主事）

〔事務局〕 後藤 政司（文化振興課長）

〔調査員〕 岸 道三（文化振興課副主任主事）

平成9年度

〔調査指導者〕 岩橋 孝典（島根県教育委員会埋蔵文化財課主事）

〔事務局〕 後藤 政司（文化振興課長）

〔調査員〕 岸 道三（文化振興課副主任主事）、高橋 智也（同 主事）

糸賀 伸文（同 臨時職員）

5. 本書で使用した遺構略号は次の通りである。

S D—溝、S K—土坑、S X—落ち込み状遺構

6. 本書で使用した方位は磁北を示す。

7. 本書に掲載した「試掘トレンド位置図」、「発掘調査区及び位置図」は出雲土木建築事務所作成のものを淨写して使用した。

8. 本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

9. 本書記載の遺物実測図及び写真撮影については、岸が大部分を行ったが、一部については高橋、糸賀がこれを行った。
10. 本書の執筆・編集は上記調査員の協力を得て、岸が行った。
11. 地質分析については、川崎地質株式会社に委託し、これを行った。また、地質分析の結果については、同社の渡辺 正巳氏に玉稿を賜った。
12. 本遺跡出土の墨書き器については、島根県埋蔵文化財調査センター主事 平石 充氏に玉稿を賜った。
13. 石器の石材鑑定については、山本 順三（文化振興課 副主任学芸員）がこれを行った。
14. 調査にあたっては、出雲上木建築事務所、JR出雲工事事務所及びJR出雲鉄道部から多大な協力を得た。
15. 発掘調査及び遺物整理にあたり、次の方々に御指導、御協力を賜った。
永田 濟史（出雲市文化財審議委員）、西尾 克己（島根県埋蔵文化財課主幹）
柳浦 俊一（同 文化財保護主事）、岩橋 孝典（同 主事）
広江 耕史（島根県埋蔵文化財調査センター文化財保護主事）、平石 充（同 主事）
渡辺 正巳（川崎地質株式会社）
16. 発掘調査にあたっては、次の方々に従事して頂いた。
佐藤 保信 鐘推 蔡吉 片山 修 米山 清司 山田 恭代 吉川 善美
成相 律子 島田 幸雄 森脇 宏 水上 育夫 川島 一慶 大森長一郎
原 昭枝
17. 遺物整理、報告書作成作業については、次の方々に従事して頂いた。
飯國 陽子 石川 桂子 遠藤 恒子 太田 和子 吹野 初子 川谷 真弓
荒木恵理子 岡野 和栄 三成 留美

本文目次

I. 位置と環境	1
II. 調査に至る経緯	3
III. 藤ヶ森遺跡（I 地点）の調査	
1. 調査の概要	5
2. 遺構と遺物	5
3. 小結	24
IV. 藤ヶ森遺跡（II 地点）の調査	
1. 調査の概要	33
2. 遺構と遺物	34
3. 小結	41
V. 総括	42
考 察	
藤ヶ森遺跡（I 地点）における ¹⁴ C 年代	（川崎地質株式会社） 45
藤ヶ森遺跡の墨書き器について	（平石 充） 47
図 版	
I 地点	図版 1～図版 9
II 地点	図版 10～図版 13

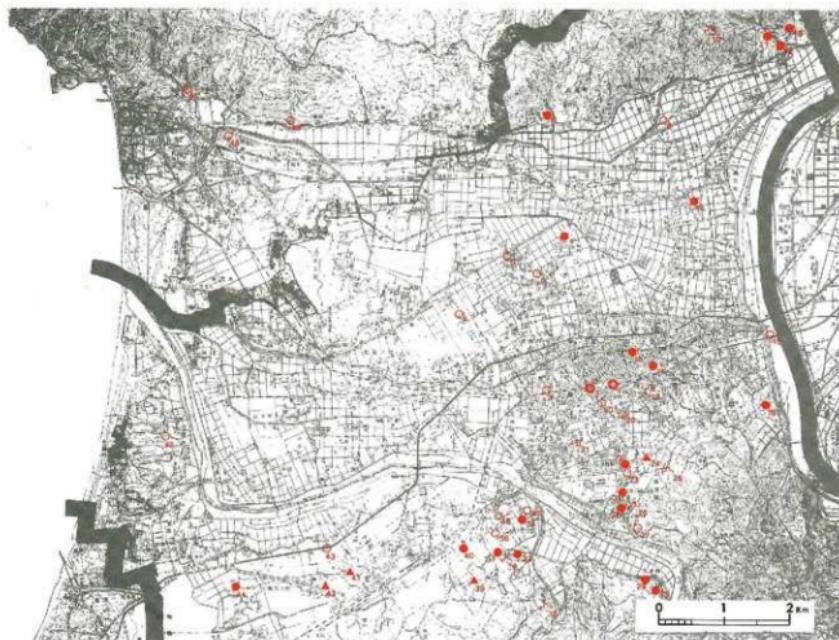
挿 図 目 次

I. 位置と環境	
第1図 藤ヶ森遺跡周辺の遺跡	1
II. 調査に至る経緯	
第2図 試掘トレーンチ堆積土柱状図	3
第3図 試掘トレーンチ位置図	3
第4図 発掘調査区及び位置図	4
III. 藤ヶ森遺跡（I 地点）の調査	
第5図 遺構外出土遺物実測図（1） （近世）	6
第6図 I 地点遺構配置図	7・8
第7図 遺構外出土遺物実測図（2） （古錢）	9
第8図 遺構外出土遺物実測図（3） （石器）	9
第9図 遺構外出土遺物実測図（4） （古代～中世）	10
第10図 遺構外出土遺物実測図（5） （古代）	11
第11図 SK 0 1 実測図	12
第12図 SK 0 1 遺物出土状況実測図	13
第13図 SK 0 1 出土遺物実測図（1）	15
第14図 SK 0 1 出土遺物実測図（2） （墨書き器）	16
第15図 SK 0 1 出土遺物実測図（3）	17
第16図 SK 0 1 出土遺物実測図（4）	18
第17図 SK 0 1 出土遺物実測図（5）	18
第18図 SK 0 1 出土遺物実測図（6）	19
第19図 SK 0 2 実測図	20
第20図 SK 0 2 出土遺物実測図（1）	21
第21図 SK 0 2 出土遺物実測図（2）	21
第22図 SD 0 1・SD 0 2 実測図	22
第23図 SX 0 1 土層断面図	23
第24図 SX 0 1 出土遺物実測図	23
IV. 藤ヶ森遺跡（II 地点）の調査	
第25図 遺構外出土遺物実測図	34
第26図 II 地点遺構配置図	35・36
第27図 SD 0 1 実測図（南側）	38
第28図 SD 0 1 実測図（北側）	39
第29図 SD 0 1 出土遺物実測図	40
第30図 SK 0 1 実測図	40
考 察	
第31図 試料採取基準	45
第32図 墨書き器実測図	47

I. 位置と環境

(1) 位置

藤ヶ森遺跡は、JR出雲市駅のすぐ南にあたり、かつては貨物列車用にJR山陰本線が複線となっていた場所に所在している。JR山陰本線・私鉄一畑電鉄連続立体交差事業に伴い、試掘調査によつて新たに発見された遺跡で、東側をI地点、西側をII地点としている。遺跡の所在地は、現在では出雲市今市町南本町となっているが、昭和初期までは広く「藤ヶ森」という字名で呼ばれていた地域にある。また、付近に残る字名には鷹ノ沢や半ヶ沢など「沢」という湿地帯を示す地名が残っているのに対し、ここでは「森」と残っているのは、斐伊川と神戸川の中間にあって、早くから微高地となっていたからと考えられる。



第1図 藤ヶ森遺跡周辺の遺跡

1. 藤ヶ森遺跡（I地点）
2. 藤ヶ森遺跡（II地点）
3. 天神遺跡
4. 白枝荒神遺跡
5. 小山遺跡
6. 矢野遺跡
7. 大塚古墳
8. 石臼古墳
9. 山持川川岸遺跡
10. 鳥ヶ垂城跡
11. 平林寺山古墳群
12. 講樹山古墳群
13. 大寺古墳
14. 萩狩古墳
15. 妻伊川鉄橋遺跡
16. 西谷墳墓群
17. 大念寺古墳
18. 聖山古墳
19. 平家丸城跡
20. 角田遺跡
21. 神門寺境内庵寺
22. 上塙治築山古墳
23. 篠山遺跡
24. 上塙治横穴墓群
25. 大井谷城跡
26. 半分城跡
27. 三谷谷Ⅰ遺跡
28. 小坂古墳
29. 岩山古墳
30. 半分古墳
31. 地藏山古墳
32. 菓子城跡
33. 放れ山古墳
34. 大堀古墳
35. 古志木郷遺跡
36. 田畠遺跡
37. 紗蘿寺山古墳
38. 青土寺山城跡
39. 地蔵堂横穴墓群
40. 宝塚古墳
41. 福知寺横穴墓群
42. 小浜山横穴墓群
43. 知井宮多聞院遺跡
44. 山地古墳
45. 上長井貝塚
46. 正蓮寺周辺遺跡
47. 出雲人社境内遺跡
48. 原山遺跡
49. 麥根遺跡
50. 藤ヶ森南遺跡

付近の集落遺跡としては、南には古墳時代の遺跡として知られる角田遺跡があるほか、平成9年度に郵便局移転に伴う試掘調査によって、弥生時代から近世に及ぶ藤ヶ森南遺跡が新たに発見されている。また、西には平成6年度に調査され、弥生時代から古墳時代の遺物を多く検出した善行寺遺跡、さらに西には弥生時代から近世に至るまでの複合集落として知られる天神遺跡が所在している。一方、東には県下最大級の前方後円墳である大念寺古墳、北には横穴式石室を有する塚山古墳がある。しかしながら、この付近一帯は早くから宅地化が進んでいたこともあり、近年の開発により部分的に新たな遺跡が発見されてはいるものの、その全容は明らかになっていないのが現状である。

(2) 歴史的環境

出雲平野をとりまく地形には、北に北山山麓、南に中国山地から派生した丘陵地が連なり、東には宍道湖、西には日本海がある。この宍道湖と日本海には、それぞれ斐伊川、神戸川が注いでおり、出雲平野は、この二大河川によって形成された沖積平野となっている。

しかし、中世以前の出雲平野の景観は、現在とはかなり異なっていたようである。現在は東流して宍道湖に注いでいる斐伊川は、当時は西流して『出雲國風土記』に記されているように、入海のような状況を呈していた「神門水海」と呼ばれる潟湖（現在の神西湖）に注いでいたようである。また、宍道湖の汀線も現在よりかなり西にあったものと考えられている。また、この頃には斐伊川、神戸川はいくつかの支流から形成されていたと考えられ、両河川によって形成された旧自然堤防上に遺跡が立地する傾向にある。

出雲平野における遺跡の初現は、平野の北にある菱根遺跡（大社町）、西の砂丘下にある上長浜貝塚が知られており、縄文時代早期末の遺物が確認されている。これに続く遺跡としては、縄文時代前中期から中期にかけての遺物が確認されている上ヶ谷遺跡（斐川町）があるが、その他では確認されていない。縄文時代後期・晩期になると、平野の北に出雲大社境内遺跡・原山遺跡（大社町）が営まれるほか、南の丘陵下にある三田谷Ⅰ遺跡でも土器や丸木舟などの多量の遺物が確認されている。また、平野中央部の矢野遺跡からも少量の遺物が発見されているとともに、近年の発掘調査で藏山小路西遺跡からも遺物が確認されている。

弥生時代には、矢野遺跡などで前期の遺物が確認されているが規模は小さい。しかし、中期中葉以降、人海周辺の沖積地に集落が飛躍的に拡大し、天神遺跡・吉志本郷遺跡・正蓮寺周辺遺跡などの大集落遺跡が出現する。その中には矢野遺跡・知井官多聞院遺跡など、貝塚を伴う例もあり、地域的な特色となっている。なお、遺跡の拡大は古墳時代前期にまで及んでいる。また、弥生時代後期には、四隅突出型埴丘墓6基を含む西谷墳墓群が斐伊川に近い南の丘陵上に築造される。この中には、突出部を入れると一辺60mもある3号墓など、大形のものもあり、この頃にはある程度共同体的結合が図られ、その首長の権力が強大になってきたことが窺える。

古墳時代になると、中期の遺跡や古墳は少ないが、後期後半には今市大念寺古墳・上塙治築山古墳・地蔵山古墳など、横穴式石室を有する大規模な古墳が築造される。また、南の丘陵斜面には上塙治横穴墓群・神門横穴墓群など、大規模な横穴群が築かれ、東部出雲の安来平野・意宇平野に並ぶ勢力が存在していたことが窺える。しかし、これら古墳の被葬者を支える基盤となつたであろう大集落遺跡は現在のところ確認されていない。

奈良時代にも遺跡は点在しているが、あまり詳しいことはわかっていない。一方、この時期になると神門寺境内廃寺・長者原廃寺などの私寺が建造されるとともに、小坂古墳の石櫃や朝山古墓・菅沢古墓などの初期火葬墓があり、いち早く仏教文化が取り入れられていたことが窺える。

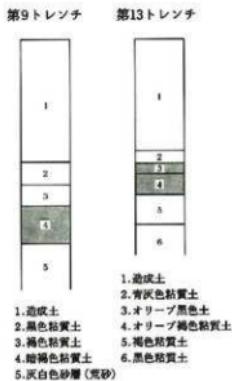
中世の遺跡は、各地で井戸や建物跡などの遺構が検出されてはいるが、集落としては部分的なものが多く、あまり詳しいことはわかっていない。その中にあって、矢野遺跡では14~15世紀にかけての溝で区画された屋敷地が発掘されており、藏小路西遺跡・原原西遺跡からは中世の木棺墓が発見されている。

II. 調査に至る経緯

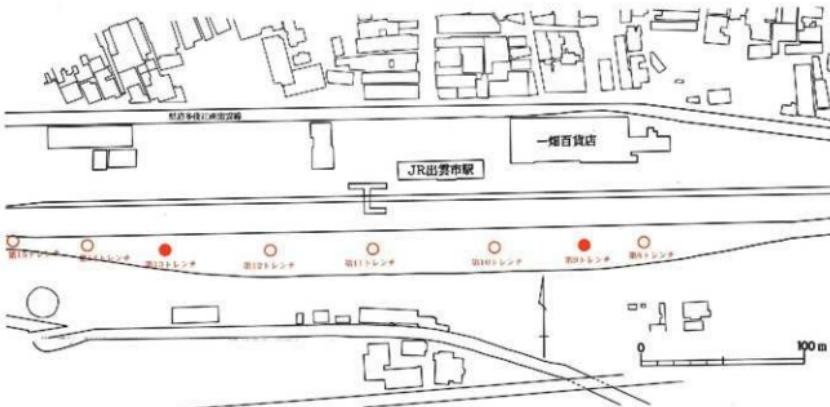
平成7年（1995）2月、出雲土木建築事務所よりJR山陰本線・私鉄一畠電鉄連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財の有無について照会を受けた。事業予定地は、周知の遺跡とはなっていなかったが、付近には平成6年に新たに発見された善行寺遺跡が所在していることや出雲市街地については宅地化が早く進んでいたため、実体がつかめていないことから、試掘調査によつて遺跡の有無を確認することとした。

試掘調査は、平成7年（1995）2月15日から2月19日までの5日にわたり、計8ヵ所のトレンチを設定して行った（第3図）。

その結果、第9トレンチ及び第13トレンチにおいて遺物が発見された。第9トレンチでは須恵器や土師器が多く、第13トレンチでは弥生土器を多く検出している。しかしながら、その他



第2図 試掘トレンチ堆積土柱状図



第3図 試掘トレンチ位置図

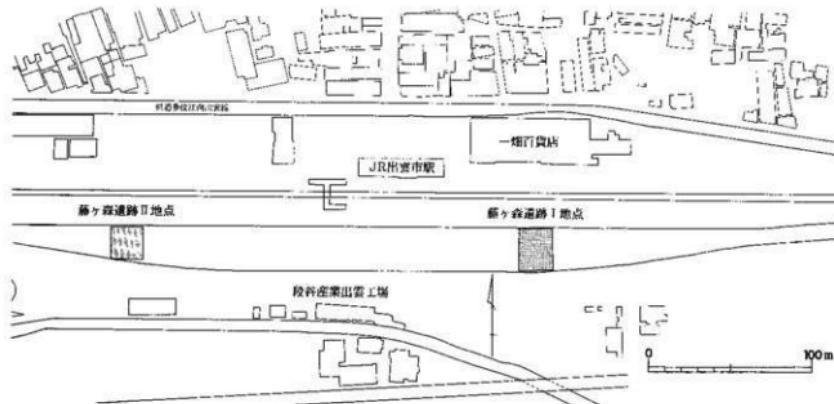
のトレンチからは、遺構・遺物とも検出されなかったことから、遺物の範囲を確認するために第9トレンチ及び第13トレンチの東西に新たにトレンチを設定して遺跡の範囲について検討した。

試掘調査の結果から、事業者である出雲土木建築事務所とJR出雲工事事務所、出雲市教育委員会、島根県教育委員会の四者で協議を重ね、第9トレンチを中心に210m²、第13トレンチを中心に225m²を発掘調査することで合意した。また、工事の遅延が難しい状況であることなどから、調査期間は平成7年（1995）7月から10月までとすることを確認した。

発掘調査に至る手続きについては、まず、新発見遺跡であることから、遺跡発見の通知（文化財保護法第57条の6）を平成7年（1995）5月11日付で文化庁長官へ提出している。なお、この時点では遺跡名を南本町遺跡（I地点・II地点）として通知したが、南本町という町名が新しい地名であることから、この報告書では藤ヶ森遺跡（I地点・II地点）と改めている。また、事業者である出雲土木建築事務所からは、平成7年（1995）5月15日付で埋蔵文化財発掘の通知（同法第57条の3）が提出された。出雲市教育委員会ではこれを受け、埋蔵文化財発掘調査の通知（同法第98条の2）を同年6月1日付で文化庁長官へ提出している。

発掘調査は、平成7年（1995）6月から準備を進め、同年7月5日から開始した。調査地点は、試掘トレンチの第9トレンチ付近をI地点とし、第13トレンチ付近をII地点とした。調査地は、JR出雲市駅のすぐ南で、かつては貨物列車用に複線となっていた所であり、70~80cmの盛土がしてあったため、重機によって盛土を取り除き、排土した。その後、各地点に東西、南北とも5m間隔のグリッドを設定したのち、発掘調査を進めていった。そして、夏の猛暑とI地点については水処理に悩まされながらも、同年10月24日に調査を終了した。

なお、調査終了後に埋蔵文化財発見届（遺失物法第13条）、埋蔵文化財保管証をそれぞれ出雲警察署、島根県教育委員会に提出している。



第4図 発掘調査区及び位置図

藤ヶ森遺跡（I 地点）

III. 藤ヶ森遺跡（I 地点）の調査

1. 調査の概要

層序（第6図）

I 地点は、南北15m、東西14mの210m²を対象に発掘調査を実施した。

J R山陰本線敷設時の盛土を約80cm除去した後に調査を開始したが、調査区での層序は、ほぼ同じ様相を示している。盛土の下は、上層から灰褐色粘質土、暗オリーブ褐色粘質土、オリーブ褐色粘質土、暗灰色粘質土と堆積しており、灰白色荒砂層に達する。特に、下位2層からは湧水がひどく、水処理に悩まされた。また、同じレベルで異なる時期の遺構が検出されたことから、遺構面上層の堆積土は、遺構が築かれた後の時期に何度も削平を受けたものと考えられる。

遺構

遺構は、全て暗灰色粘質土の下面で検出している。調査区の南側からは、湧水がひどく形状を確認することはできなかったが、弥生時代の落ち込み状遺構を1検出している。また、中央部から北東部にかけては、平安期から中世にかけてのものと考えられる土坑状遺構2を検出しているほか、遺構の切合の関係から、この土坑よりも古い時期に築かれた溝状遺構2を検出している。なお、調査区の西側には遺構は認められなかった。

遺物

遺物は、盛土以外は遺構中、遺構上面に堆積しているほとんどの層に包含しており、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、カワラケのほか、石器、曲物などがある。特に、遺構上面に広く堆積しているオリーブ黒色粘質土、暗灰色粘質土は、奈良時代～中世にかけての須恵器、土師器が多く認められ、安定した遺物包含層となっている。

遺構中の遺物は、SK01からの出土がほとんどで、平安期から中世にかけての須恵器、土師器が多く出土しているほか、遺構中央最下層からは曲物も出土している。また、古い時期の遺物も若干混入しており、1点ではあるが、弥生時代前期の甕片が出土しているのが注目される。その他の遺構からは、SX01で弥生時代中期頃の土器、SK02で平安時代の遺物を中心に検出している。なお、包含層中とSK01、SK02からは奈良～平安期にかけての製塙土器が出土しているのも注目される。

そして、発掘調査によるものではないが、調査区脇で駅舎高架のため、杭を設置する工事に際し、地表下15～20m付近の砂層中から、ヤマトシジミ、カキなどの貝殻が出土していることは、この地域の古地形を考えるうえでも、貴重な資料を得ることができた。

2. 遺構と遺物

遺構外の出土遺物

遺構上面に堆積している灰褐色粘質土、暗オリーブ褐色土、オリーブ褐色粘質土、暗灰色粘質土の全ての層が遺物包含層となっており、奈良・平安期から近世にかけての遺物を多く検出している。

出土量としては、平安期の土師器が最も多く、層位的には上位2層を中心に近世、下位2層に古代から中世にかけての遺物を多く包含する傾向にある。

近世の遺物（第5図）

近世の遺物には、擂鉢や木製品・古銭などがあり、上位2層を中心に出土している。

1～3は擂鉢である。1は複合口縁状に屈曲する口縁部を有し、外面にヘラ状工具で「」印をつけている。2は、高台を有する底部破片であるが、外面高台部にヘラ状工具で押されたような痕跡が認められ、内面の擂目が非常に密に入る。3も高台を有する底部で、内面の擂目は非常に密である。

4は、桶蓋と考えられる。三枚の組み合わせによって蓋としたものと考えられ、円形を呈する側面は面取りされている。5は用途不明の板状木製品であるが、非常に丁寧に仕上げられている。片端はやや斜めに切り離されており、平面の形状はきちんとした長方形とはなっていない。

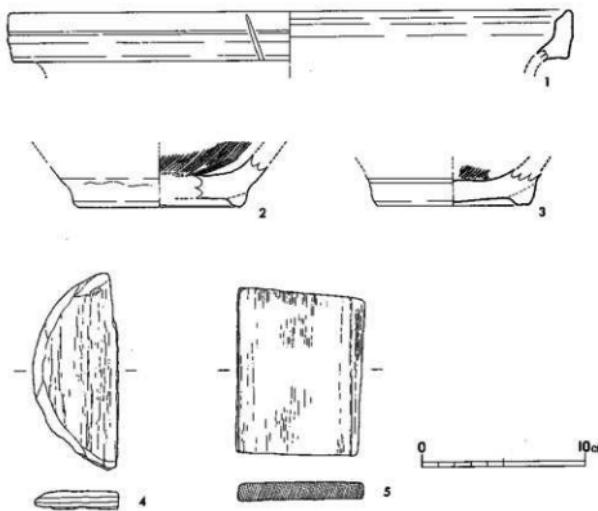
古銭（第7図）

古銭は、計3枚出土している。1は、寛永通宝の新寛永と呼ばれるもので、裏面には「元」の文字が入る。鋳造年代は寛保年間（1740年代）で、大阪・高津で鋳造されたものであろう。2も新寛永であるが裏面は無文で、年代は不明である。3は、聖宋元宝と呼ばれる北宋から輸入された渡来銭であり、鋳造時期は10世紀後半から12世紀代にかけてと考えられる。包含層中やSK01・SK02からは、平安期の土器が多く出土しており、この時期に輸入されたものであろう。

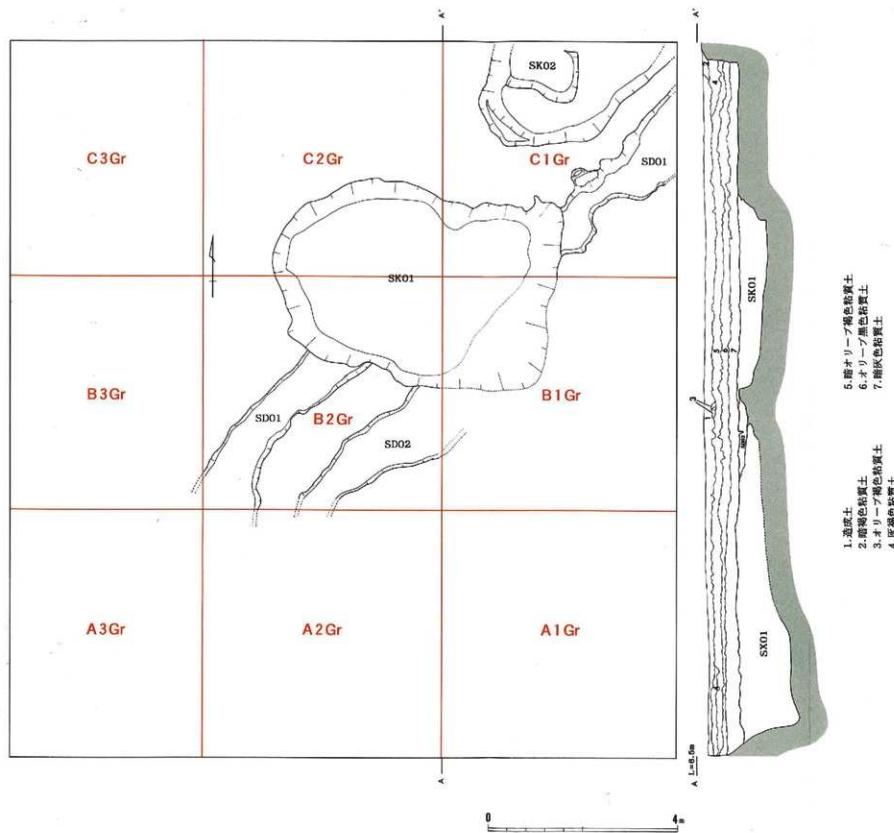
石器（第8図）

石器は包含層中から3点出土している。いずれも時期は不明であるが砥石である。

1は片端が欠損しているが、上下両面が使用により、かなり凹んでいる。石材には珪長質細粒砂岩を用いている。2は両端を欠損しているが、全面に使用痕が残っている。上面には鉄器の刃先を漬したような痕跡が認められる。石材には流紋岩を用いている。



第5図 遺構外出土遺物実測図(1) (近世)



第6図 I地点遺構配置図

3は、両端を欠損しているが、全面に使用され、一部には狭い使用面が残っていることから、細かい作業に使用したと考えられる。石材には珪長質中粒砂岩を用いている。

古代から中世にかけての遺物

古代から中世にかけての遺物のうち、陶器、土師器を第9図にまとめている。

1は、陶器の擂鉢で、口縁部は逆「く」の字状に屈曲する。

内面には約3mm間隔の擂目が部分的に認められる。その特徴から、室町期（14世紀頃）のものと考えられる。

2は土師器の擂鉢である。体部から口縁部にかけて直線的に伸びる逆「ハ」の字状を呈しており、口縁端部はやや凹面を作り出している。内面に残る1単位4本からなる擂目は、縱横、斜め方向に部分的に入っている。このような擂鉢は13世紀頃のものと考えられ、市内では矢野遺跡（第2地点）⁽¹⁾からも出土している。

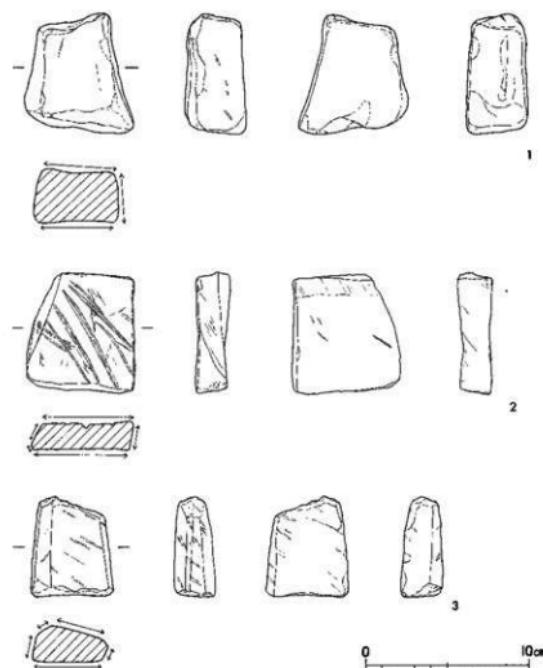
3～7は、土師器の壺である。内外面とも回転ナデにより仕上げられており、体部には回転水引き痕が明瞭に残っている。底部は回転糸切りで、糸切り時の切離しにより、底部に厚みがあるのが特徴である。時期については、全体のプロポーションが把握できないため不明であるが、完形で出土している土器には、10世紀前後から12世紀代にかけての遺物が認められていることから、その範疇に入るものであろう。8～13も土師器の壺であり、内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りにより仕上げられている。底部の厚みが薄いのが特徴である。なお、13は、口径に対して底径が小さくなり、逆「ハ」の字状に開くものと考えられ、12世紀代の特徴を示している。



第7図 遺構外出土遺物実測図(2) (古銭)

0

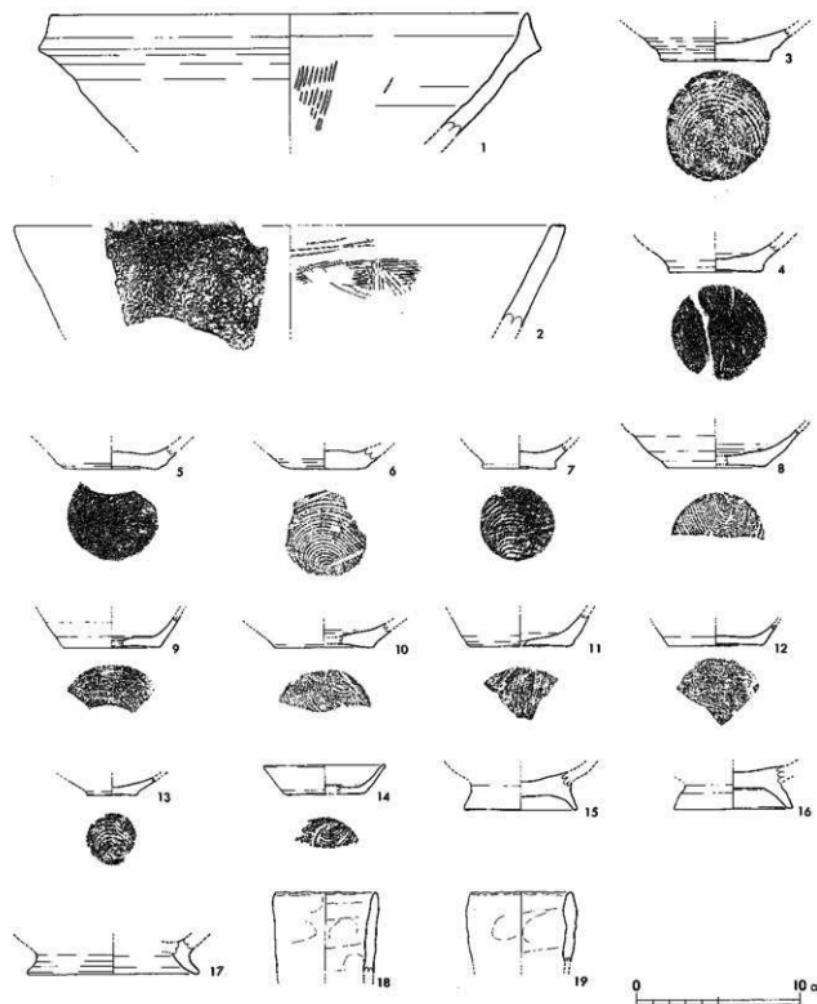
5cm



第8図 遺構外出土遺物実測図(3) (石器)

14は、上師器の小皿である。小皿は11世紀後半頃から導入されたと考えられており、器形からは判断できないが、他の出土遺物から考えると12世紀代の可能性が強い。

15～16は、土師器の足高台付杯である。このタイプの土器も、小皿と同様、時期的には11世紀後半から認められるものである。15・16は高台部が直立ぎみで、17は外方へ屈曲している。

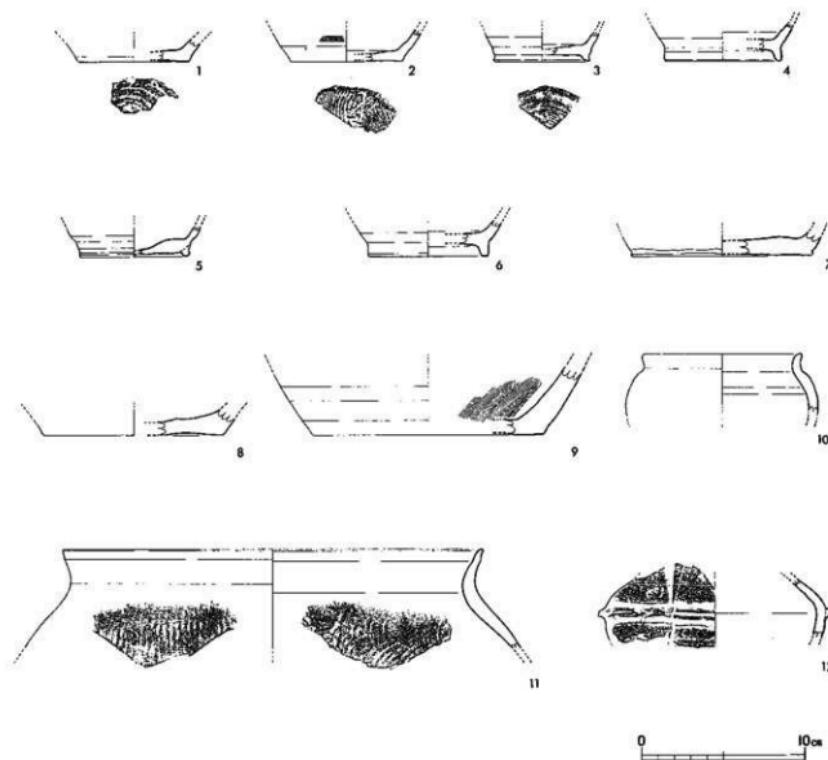


第9図 遺構外出土遺物実測図(4)(古代～中世)

18・19は製塩土器である。いずれも六連式と呼ばれる製塩土器で、砲弾状を呈すると考えられ、内外面とも指頭圧痕列が認められる。製塩土器は、市内上長浜貝塚²⁾でも多く認められており、地域的な特徴としては六連式にみられるような内面の布目痕が認められないことがあげられる。

遺構外の出土遺物には、土師器などの量ではないが、須恵器も若干認められる（第10図）。

1・2は無高台の杯で、底部は回転糸切りにより切り離されている。奈良時代以降のものであろう。3～6は高台付の杯で、高台断面の特徴から、4・5は奈良期、3・6については平安期のものであろう。7～9は、甕か壺の底部である。7は外面底部付近に1条の凹線を粗雑に施している。9は、内面底部付近を細かいハケにより調整している。10はやや小形の短頸壺であり、内外面ともナデ調整により仕上げられている。11は、甕の口縁部で、外面頸部下はタテ方向のタタキ、内面須部下は放射状のタタキにより調整されている。12は壺の肩部であろう。外面には1条の貼付け突帯を有し、その上部に3本単位からなる2段以上の沈線を施している。

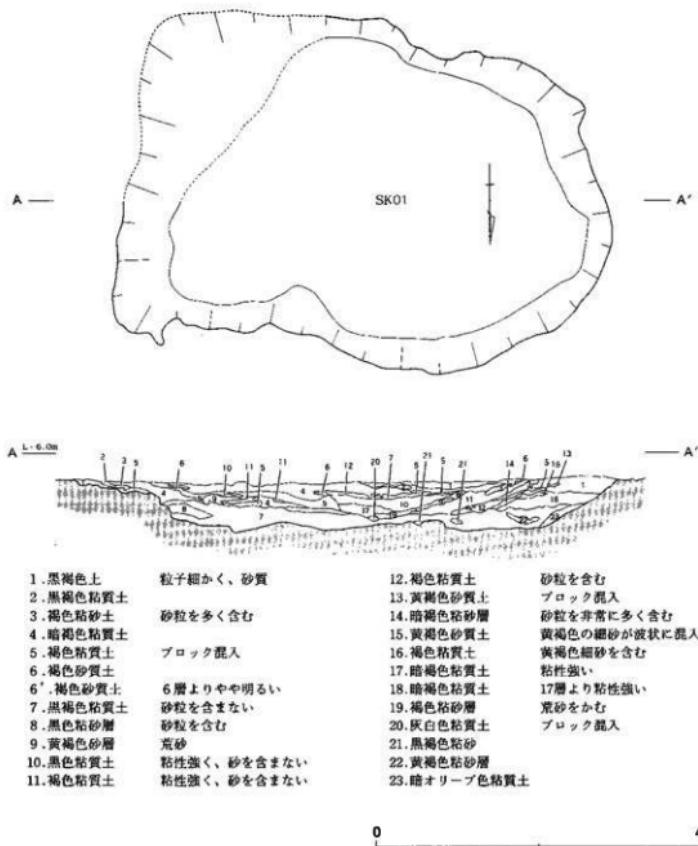


第10図 遺構外出土遺物実測図(5)(古代)

SK01 (第11図)

調査区の北東部、暗灰色粘質土の下面で検出した土坑状遺構である。東側の一部については湧水がひどく、明確なプランを検出することはできなかったが、東西長約6.0m、南北長約4.0mを測り、やいびつな橢円形を呈している。検出高は標高約5.84mである。

覆土には黒褐色や褐色の粘質土の間に波状に砂質土が堆積し、部分的には粘砂層を形成している。これらの状況から、かなり長期間にわたって次第に埋まっていったと考えられる⁽³⁾。なお、最下層は、この付近の基盤層である灰白色荒砂層にまで達している。

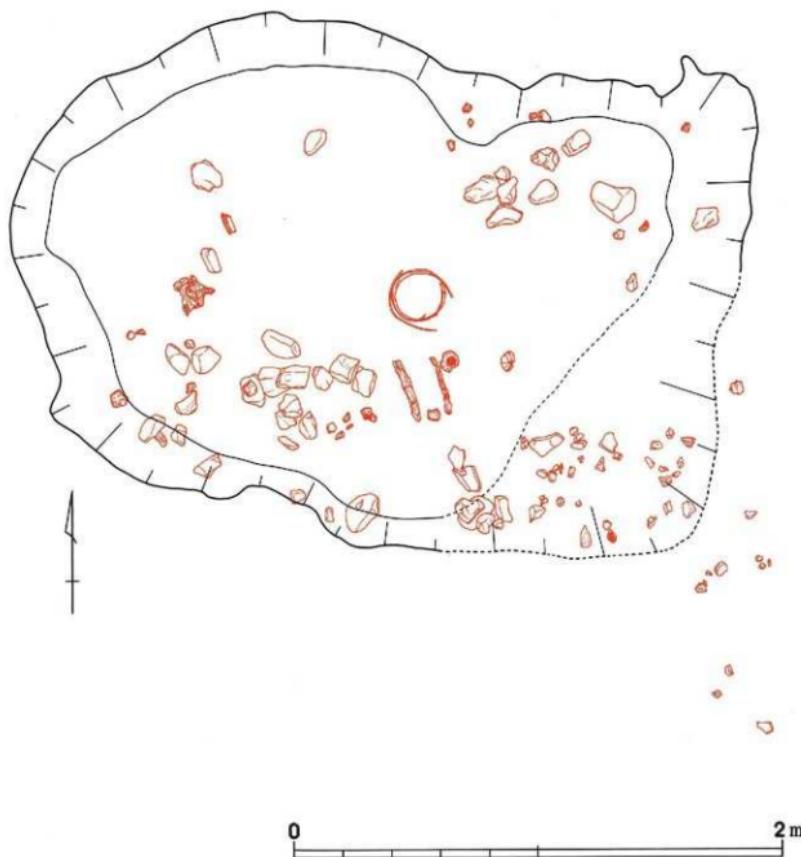


第11図 SK01 実測図

断面の形状は両肩からなだらかに落ち、底面はやや平坦に作り出しており、最深部までの深さは約60cmである。

遺物は平安期の土師器を中心に検出しているが、弥生土器や須恵器も若干混入しており、遺構中央部の最下層からは曲物が出土している（第12図）。また、中層から下層にかけては人頭大の石がかなり出土しているのが注意される。遺物の出土状況としては、層位的には最下層からの出土量が多く、位置的には遺構の南側から多く出土している。

遺構の性格としては、遺構中央部から曲物が出土していることから、井戸として利用されていたと



第12図 SK 01 遺物出土状況実測図

考えられる。遺物から判断すると、最も新しい遺物は、12世紀代のものであることから、この時期頃には井戸として利用されなくなり、廃棄されたものと考えられる。なお、弥生時代、古墳時代の遺物が若干混入していることについては、この遺構を掘削した際に、古い時期の遺構が下面に存在していた可能性もある。

SK01出土の遺物

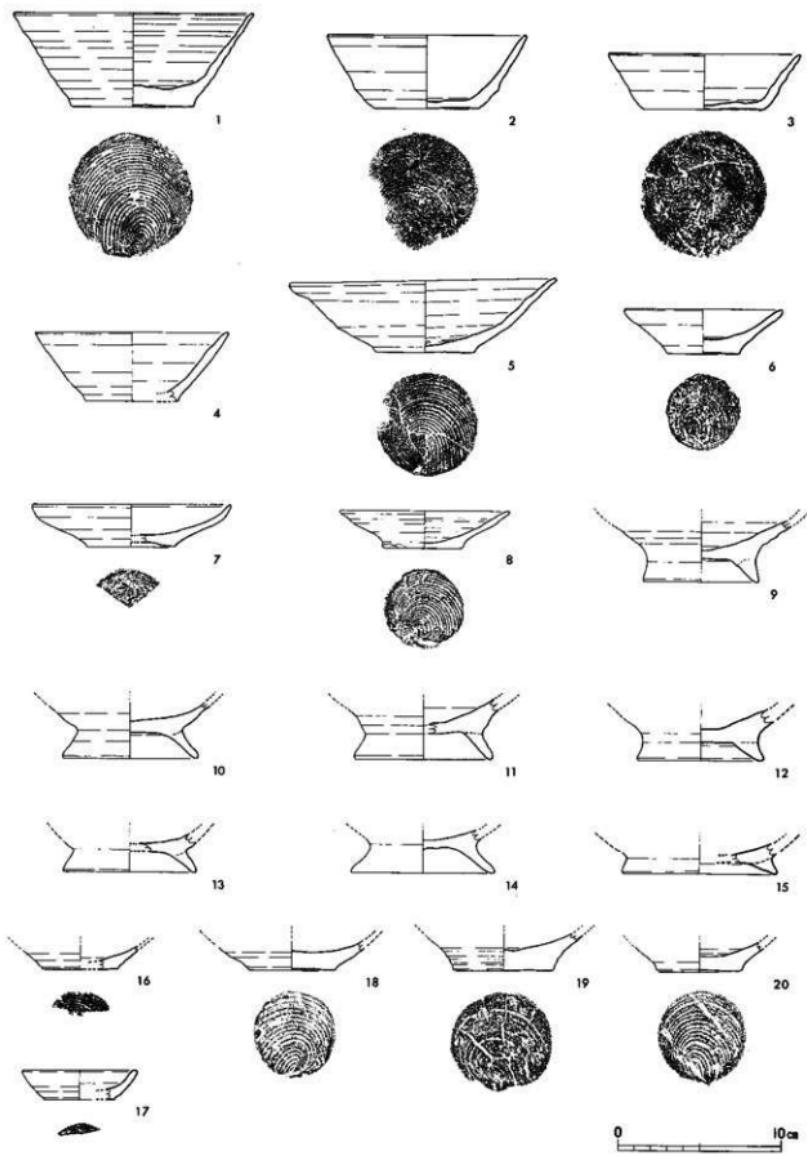
SK01からは平安期の土師器が最も多く出土しており、その中にはほぼ完形の状態で出土し、全体の形状が把握できるものがある。第13図の1～4は土師器の杯で、底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。体部には回転水引き痕が明瞭に残り、底部は回転糸切りにより切り離されている。しかし、3のように回転糸切りの後、ナデ調整により糸切り痕を消したか、あるいはヘラ切り後、ナデ調整をしているものもある。1は、底径7.4cm、口径14.6cm、器高5.75cmを測るやや大形の杯で、色調は黄褐色を呈している。なお、この杯はほぼ完形の状態で出土している。2は、形状的には1と同様であるが、器高は4.5cmとさほど高くはない。3は、器高3.4cmとさらに低く、外面全体にススが付着している。これらの特徴をもつ杯は、須恵器ではあるが、松江市神田遺跡⁽⁴⁾、長峯遺跡⁽⁵⁾、吉曾志⁽⁶⁾平廻田3号窯⁽⁶⁾などでも出土しており、10世紀前後のものと考えられる。

5～8も土師器の杯であるが、器高が低く、口径に対して底径が小さくなり、体部が逆「ハ」の字状に大きく開く。5は体部に丸みを有し、口縁端部がやや外反する。また、内外面ともに暗褐色を呈している。6・8は底部から大きく逆「ハ」の字状に開くが、口縁端部は自然に丸くおさめている。7は、口縁部のやや下から内側に屈曲し、端部にかけてやや内湾ぎみに立ち上がる。これらの杯は、松江市天満谷遺跡SD-03付近、遺構外出土土器⁽⁷⁾、斐川町西石橋遺跡墓壙出土⁽⁸⁾の土器に形状が非常によく似ており、12世紀代のものと考えられる。

9～15は足高高台を有する土師器杯である。これらの中には高台部が大きく外傾するもの（10・11・13・14）、外傾するが、外観的には直立に近いもの（9・12）、高台部が極端に短いもの（15）に類別できるが、これらの特徴からは時期的判断は難しい。

16・17は小皿である。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りにより仕上げられている。小皿の出現が11世紀後半と考えられることから、それ以降のものであろう。

18～20は、杯の底部破片であり、内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りにより切り離されている。全体の形状が把握できないため、時期的な判断はできないが、底部に厚みを有するのが特徴である。第15図の1～3は、同様に底部に厚みを有する土師器の杯で、3は体部に丸みを有し、口径に対して底径が小さくなるものと考えられる。また、2と3は胎土、焼成とも非常によく似ており、同じ粘土塊から同じ窯で焼成されたと考えられ、その特徴から12世紀代のものと考えられる。4～6は口縁部の破片で、4は口縁端部を自然に丸くおさめ、5・6は口縁端部が外反するという特徴をもつ。7～18については、土師器杯の底部付近の破片であり、全体の形状については十分な把握はできない。断面から推測するかぎりでは、口径に対して底径が小さいもの（7・16・18）、体部にかなり丸みを有するもの（8・9・10）、口径に対して底径がやや大きくなると考えられるもの（13・14・15）などに類別できる。しかし、これらの特徴からは、時期的な判断は難しい。なお、12は底部をヘラ切りにより切り離したものと考えられる。



第13図 SK01出土遺物実測図(1)

また、SK01からは墨書き器が1点出土している(第14図)。底径6.6cm、口径12.7cm、器高4.4cmを測る土師器壺で、底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。内外面は回転ナデにより調整されており、底部は回転糸切りにより切り離されている。なお、外面底部から体部にかけてはスヌが付着している。この壺の製作時期は、その特徴から10世紀前後と考えられる。

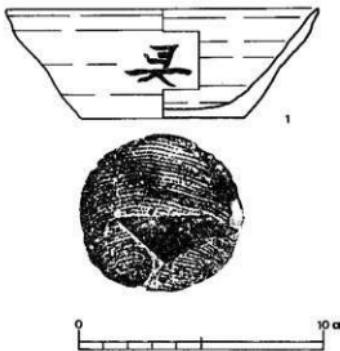
墨書きは、体部のはば中央に書かれており、肉眼で見る限りは漢字1字で「具」と読めるが、X線写真から観察すると、下半部が「女」とも読めることから、あるいは漢字2字で「日女」と読める可能性もある。後者からは人物名が想定されるのではないだろうか。なお、この部分以外には墨書きは認められない。近年、発掘調査が行われている三田谷^{さみだにや}I遺跡からは、奈良～平安時代にかけての墨書き器が10数点出土しており⁽⁹⁾、その中には、「坂」や「宅」などの墨書きが認められている。また、天神遺跡では「早天」^{はやまつ}、小山遺跡からは「池田(内)」^{いけだ(内)}と書かれた土器も知られてはいるが、今まで遺跡としては知られていなかった当遺跡から墨書き器が出土したことは非常に興味深い。

第16図-1は土師器壺の口縁部である。口縁端部は丸くふくらみ、やや内側に突出させている。外面はナデ調整の後、タテ方向のハケ、内面は頸部下からケズリによる調整がなされている。2・3は土師器の甕であろう。2は口縁部内面にはヨコ方向のハケが認められ、外面にスヌが付着している。3は内面頸部下はケズリによる調整がなされ、外面頸部には1条の凹線が粗雑に施されている。これらの土師器は、他の出土遺物から考えると、奈良～平安期にかけてのものと考えられる。

4は、須恵器の壺と考えられ、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、焼成がやや軟質である。形状は前述した第13図-1・2とよく似ており、10世紀前後のものと考えられる。5は須恵器の高台付壺で、奈良時代以降のものであろう。6・7は、須恵器壺の底部であろう。6は、底部の径に対して体部最大径はさほど大きくならず、底部外面に糸切り痕が残る。いずれも、奈良時代以降のものであろう。

8・10は黒色土器である。黒色土器とは、いぶし焼きにより器表面に炭素を吸着させて黒化処理を施した土器で、器表面は緻密なヘラミガキにより調整されているものである⁽¹⁰⁾。内面のみを黒化処理したものを内黒、外面とも黒色に仕上げたものを両黒と呼称しているが、当遺跡から出土したものは2点とも内黒土器である。8は内黒土器の壺で、口縁端部が外反し、内面はヨコ方向のミガキ、外面にも一部ヨコ方向のミガキが認められる。10も内黒土器の壺であり、同様に口縁端部が外反し、外面とも緻密なヨコ方向のミガキによる調整がなされている。いずれも、その特徴から10世紀代のものと考えられる。

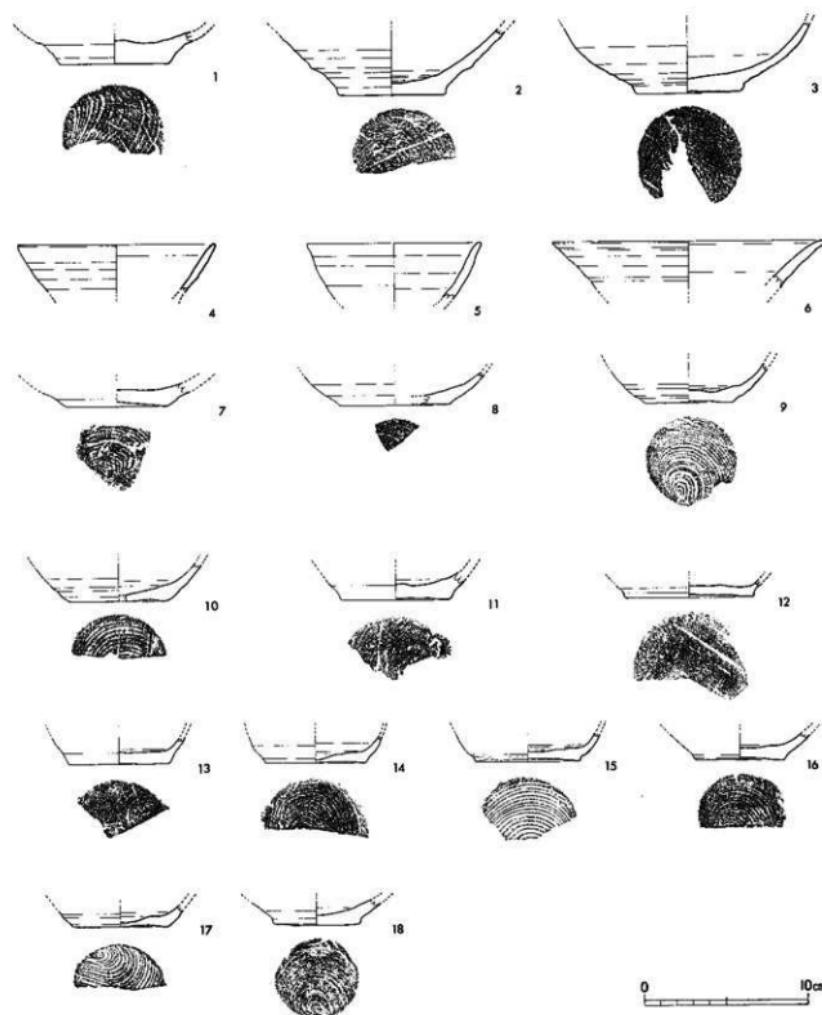
9は、製塩土器である。内外面とも指頭圧痕列が認められ、遺構外出土のものと同様、六連式系統



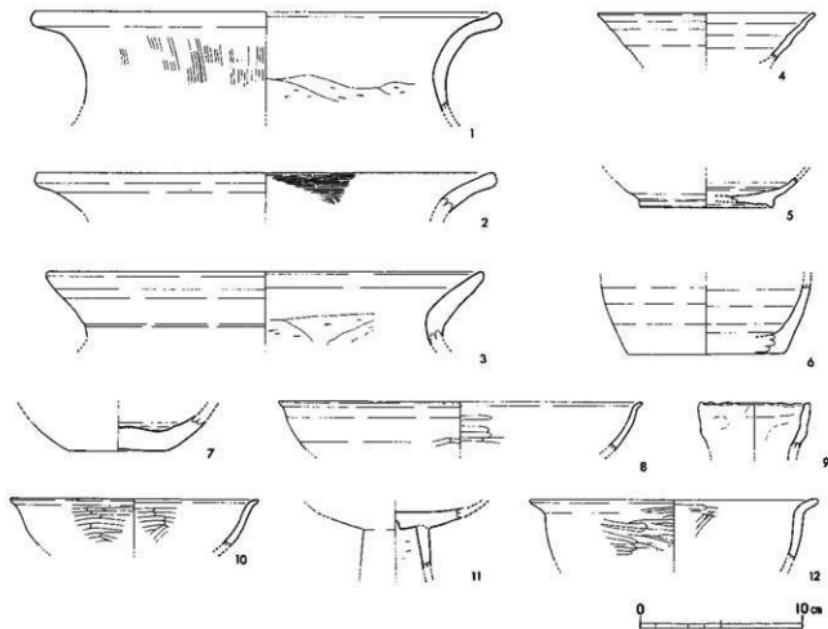
第14図 SK01出土遺物実測図(2)

の砲弾状を呈する焼塙土器と考えられ、色調は橙褐色である。なお、当遺跡から出土する製塙土器は、いずれも橙褐色を呈しているのが特徴である。

11は、土師器の高杯である。脚部と杯部は円盤充填法により結合されている。古墳時代の遺物と考えられるが、当該期の遺物としては1点のみの出土である。



第15図 SK01出土遺物実測図(3)

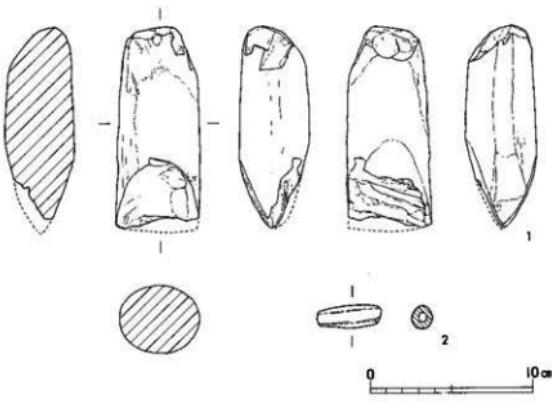


第16図 SK01出土遺物実測図(4)

12は弥生土器の甕、あるいは鉢であろう。口縁端部が外反し、内面口縁部にはヨコ方向、頸部下はタテ方向のミガキ、外面はヨコ方向のミガキにより調整されている。これらの特徴から、弥生時代前期末の範疇に入る資料と考えられる。なお、土器としては弥生時代のものは1点のみである。

石器・土製品（第17図）

1は、磨製の大型蛤刃石斧である。刃部を一部欠損して



第17図 SK01出土遺物実測図(5)

いるが、両面から鋭角的な刃部を作り出し、片端は装着しやすいように打ち欠いている。石材には玄武岩を用いている。弥生時代の遺物と考えられ、第16図-12の土器が、弥生時代前期末のものであることから、同時期のものである可能性が高い。

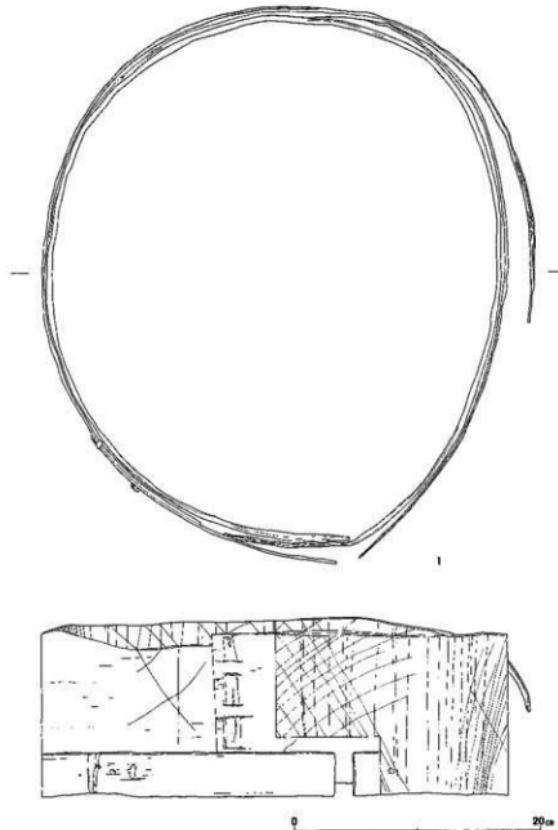
2は、管状土錐であり、長さ3.9cm、幅1.3cmを測る小形のものである。

第18図-1は、円形曲物である。この曲物は、遺構のほぼ中央最深部から出土している。やや変形しているが、径約38.0cm、側板の高さ約14.0cmを測る。外側には底板を支えるため、4カ所に木釘を通す孔を穿つ木枠が残り、側板にも同様の穴があるが、木釘、底板は検出されていない。

側板の桜皮縁じは外、内ともに4段綴じである。側板の内面には、曲げやすくするために小刀でつけたよ

うなタテ方向の線と斜め方向の線が入り、一部では斜格子状の文様をなしている。外面にも桜皮縁じ付近の一部にタテ方向の線と斜め方向の線が認められる。

木枠の桜皮縁じは、外3段、内2段に綴じられ、5cmほど離れた箇所にも外内1段綴じされている。なお、木枠の内側にも斜め方向の線が一部に認められる。



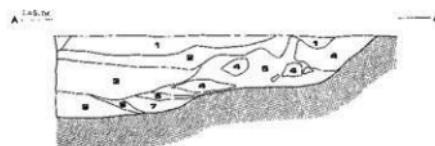
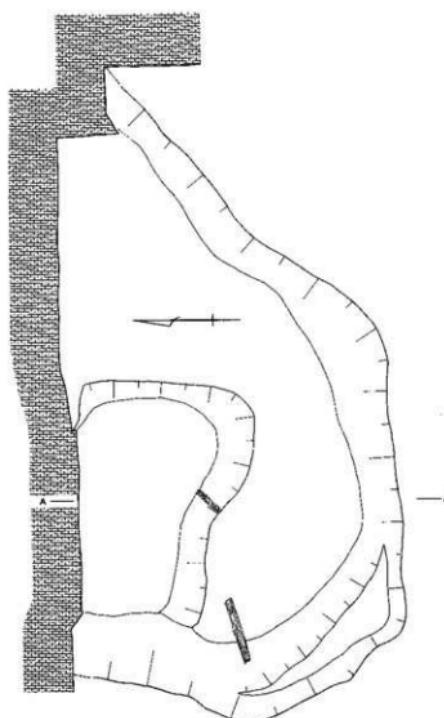
第18図 SK01出土遺物実測図(6)

SK 02 (第19図)

調査区の北東部で検出した土坑状遺構で、北側は調査区外に伸びており、完全な形では検出できなかった。検出した状況では、東西長3.7m以上、南北長1.96m以上を測る。検出高は、標高5.6mである。断面の形状は、肩部からなだらかに落ち、一旦平坦面を作り出し、西に片寄った方向へさらに落ち込み、底部を平坦に作り出している。

覆土には粘質土が堆積しており、部分的に粗砂を含む層がある。最深部までの深さは約50cmである。遺物は細片が多く、SK01からの出土量と比べても極端に少ないが、土師器、製塙土器、木製品などが出土している。

遺構の性格は不明であるが、10世紀前後と考えられる遺物が多く検出されていることから、最終的には、当該期には使用されなくなったものと考えられる。



- | | |
|-------------|---------------|
| 1. 茶褐色土 | 6. 褐灰色粗砂 |
| 2. 暗褐色土 | 7. 暗褐色土 |
| 3. 暗褐色土 | 粘性強く、しまりがない |
| 4. 灰褐色土ブロック | 8. 褐灰色粗砂 |
| 5. 暗褐色土 | 9. 暗褐色土 |
| | 粘性強く、3層よりやや暗い |

0 2m

第19図 SK 02 実測図

SK 02 出土の遺物（第20図）

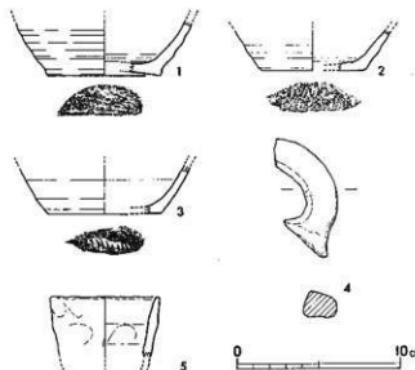
1～3は土師器の壺である。いずれも内外面は回転ナデによって調整されている。1は底部から口縁部にかけてやや内湾ぎみに立ち上がり、底部はナデで糸切り痕を消したか、あるいはヘラ切り後、ナデ調整されたと考えられる。2は、底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、底部調整は1と同様にナデによる調整がなされている。なお、内外面とも朱塗りされている。3は、底部から口縁部にかけてやや内湾ぎみに立ち上がる。これらの壺は、全体の形状が把握できず、時期的判断は難しいが、10世紀前後である可能性が強いのではないだろうか。

4は土師器の把手である。手捏ねで、四面とも平坦を意識して作られている。古墳時代のものであろう。

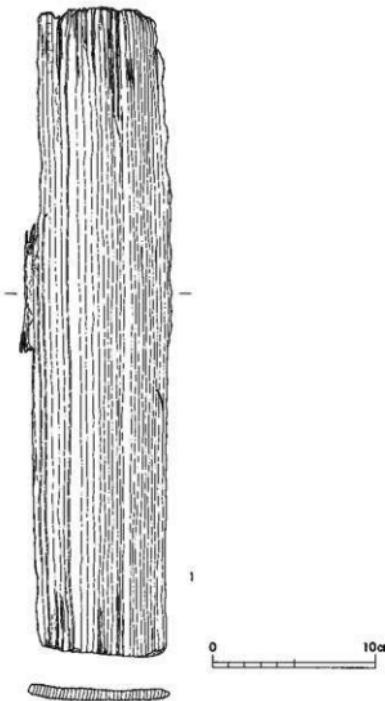
5は、六連式系統の砲弾状を呈する製塩土器である。SK01や遣構外出土の製塩土器と同様に色調は褐色をしており、時期的には奈良から平安期にかけてのものであろう。

第21図-1は、用途不明の板状木製品である。この木製品は、遣構の西側中層から出土しており、片端は欠損しているが、現状では幅9.0cm、長さ39.3cm、厚さ0.8cmを測る。なお、墨書などは認められない。

以上のように、遺物には古墳時代のものが1点認められるものの、その他はおおよそ平安期のものであることから、SK02は平安期に築かれた可能性が強い。



第20図 SK 02 出土遺物実測図(1)



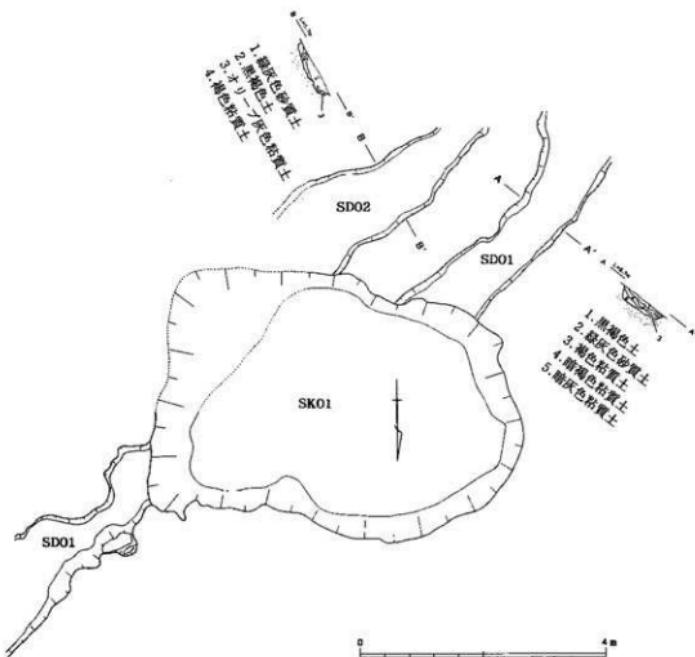
第21図 SK 02 出土遺物実測図(2)

SD01・SD02 (第22図)

調査区のはば中央から北東に向かって伸びる2条の溝状遺構である。西側のSD01は、北側はSK01によって一部が壊されているが、北東部にさらに伸び、調査区外へと達する。検出高は、標高5.61mで最大幅は約1.2m、深さは約18cmを測る。上部が削平されているため、本来はもう少し深さがあったものと考えられる。覆土には、上層に黒褐色土、緑灰色砂質土が堆積し、下層には粘質土が堆積している。断面は底面を平坦に作り出し、逆台形状を呈する。なお、遺構の南側については、湧水がひどく、プランの確認ができなかったが、この遺構の下面にはSX01が築かれている。

東に位置するSD02は、形状、断面、覆土ともSD01とはほぼ同じ様相を示しており、SD01と同時期に築かれたものと考えられる。また、北側及び南側については、SD01同様に湧水がひどく、プランの確認をすることができなかった。

遺構の性格、時期については、遺物が全く出土しておらず不明であるが、遺構の切合い関係から考えると、10世紀前後に築かれたSK01よりも古く、付近の包含層中やSK01からも古墳時代や奈良時代の遺物が出土していることを考えると、当該期頃に築かれた可能性が強い。



第22図 SD01・SD02実測図

SX01

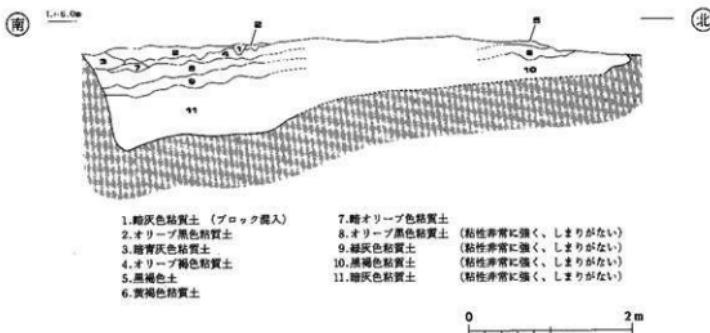
調査区の南側、A 1～A 2 Grにかけて検出した落ち込み状遺構である。この遺構は、湧水によりプランが判然としなかったことから、一部分を深掘りし、トレンチによる調査とせざるを得なかった。

土層断面（第23図）から観察すると、上層の1～7層は主に奈良～平安期にかけての遺物包含層であり、これは調査区全域にわたって広く堆積している。注意されるのは、8～11層で、調査区の基盤層である灰白色砂層が、A 1～A 2 Gr付近では次第に落ち込み、その部分に8～11層が堆積している。なお、検出できた8層上面から最深部までの深さは約1.0mで、調査区外へ向かってさらに深くなるものと予想される。

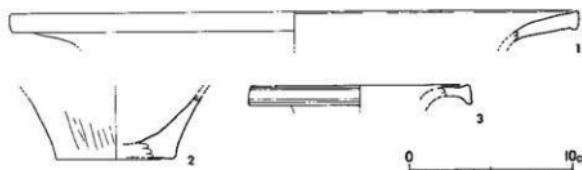
この層位からは、細片ではあるが、弥生土器のみが出土している（第24図）。1は壺の口縁部である。頸部から大きく外反するタイプのもので、口縁端部は上下に少し拡張している。2は、壺か壺の底部である。外面にはタテ方向のミガキによる調整が行われている。3は、やや小形の壺の口縁部である。1と同様に頸部から大きく外反して、口縁端部が上下にやや拡張し、凹線を2条施して。これらの遺物は、その特徴から弥生時代中期中葉から後期前葉にかけてのものであろう。

I 地点の脇から出土した貝について

I 地点の発掘調査区から西へ約10mほどの地点において、駅舎高架の杭を設置する工事の際に、地表下約15～20mの砂層中から、多くの種類の貝殻が出土している。



第23図 SX01 土層断面図



第24図 SX01 出土遺物実測図

これらの貝殻を列記すると、ヤマトシジミ、キヌボラ、カキ、ナガニシ、ヒナガイ、カニモリガイ、モミジボラ、ツノガイ、キサゴなどである。中でも最も多いのが汽水域でしか生息しないヤマトシジミであった。これらの資料は、その堆積した時期については不明であるが、この地域の古地形を考えるうえでも非常に興味深い資料といえる。

3. 小 結

(1) 遺 構

I 地点においては、溝状遺構 2、土坑状遺構 2、落ち込み状遺構 1 を検出している。それぞれの遺構の切合の関係から、この地点で最も古い遺構は、SX01である。この遺構からは、弥生時代中期頃の遺物が出土しており、当該期に築かれた可能性が強いが、¹⁴C 分析からは、堆積土の時期が縄文時代後期頃とする結果が得られており、注意する必要がある。

次に、SD01とSD02が同時期に築かれているが、この 2 つの遺構からは出土遺物が皆無であり、時期的判断は難しい。しかし、包含層中と、この 2 つの遺構の上から築かれた SK01 から出土している遺物の中には、古墳時代・奈良時代の遺物が若干含まれていることから、この時期に築かれた可能性が強いのではないだろうか。

SK01 は、I 地点の遺構の中では最も新しい時期のもので、平安時代中頃（10世紀前後）に築かれ、12世紀代まで利用された後、廃棄されたと考えられる。SK02についても平安時代中頃に築かれたものと考えられるが、SK01に比べるとやや早い時期に廃棄された可能性が強い。

(2) 遺 物

弥生時代から近世にかけての遺物が出土している。最も古い遺物は、SK01から出土している大型蛤刃石斧と弥生時代前期末の土器である。しかし、これらは直接 SK01 に伴うものとは考えにくく、この付近に弥生時代の遺構が存在していたことを示す資料といえる。弥生土器は、その他に SX01 から弥生時代中期中葉から後期前葉にかけての土器が出土している。

古墳時代・奈良時代の遺物は、包含層中や、遺構内からわずかに認められるものの、量は少ない。平安期の遺物は量的に最も多く、中にはほぼ完形の状態で出土しているものもあり、出雲地方での平安時代の上器を考えるうえで、貴重な資料となった。特に、SK01、SK02からの出土が多く、器形のはほとんどを壺が占めている。

これらの壺の特徴から、おおよそ 10 世紀前後から 12 世紀代頃にかけての資料がある。10 世紀前後の壺は、底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる傾向にある。12 世紀代の壺は、器高が低く、口径に対して底径が小さくなり、体部が逆「ハ」の字状に開く傾向にある。また、細片の中には 11 世紀代のものも含まれているものと考えられる。その他、足高台を有する壺も多く出土している。

中世・近世の遺物としては、擂鉢や古銭、木製品などが出土しているが量は少ない。しかし、その中には 13 世紀代の擂鉢が 1 点出土しているのが注目される。

以上のように、I 地点では、弥生時代から近世に至るまで集落が営まれていることが知られる。しかし、遺構・遺物の出土状況から判断すれば、集落としての中心時期は、平安時代中頃（10 世紀前後）であったと考えられる。

出土遺物観察表

構造出土遺物（土器）

件番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
5-1	C2Gr 6層	擂鉢	34.4	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	外/暗赤褐色 内/赤褐色 断/灰色	密	良好	外面口縁部にヘラ状工具痕あり
-2	B1Gr 5層	擂鉢	-	10.0	-	外/ナデ 内/擂目	赤褐色 断/灰色	密 1mmの大白色砂粒を含む	普通	外面高台部にヘラ状工具による調整痕あり
-3	C1Gr 5層	擂鉢	-	9.2	-	外/ナデ 高台部に凹線 内/擂目	赤褐色	密	やや不良	
9-1	B3Gr 6層	擂鉢	33.6	-	-	口縁部迷「く」の字 に屈曲する 外/ナデ 内/擂目	暗赤褐色	密	良好	内面スス付着
-2	B3Gr 6層	土師器 擂鉢	29.2	-	-	口縁端部に凹面をつくる 外/無調整? 内/擂目	淡褐色	密 石英・金雲母多く含む	普通	内面スス付着
-3	B1Gr 5層	土師器 杯	-	3.3	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	黄橙色	密 石英多く含む	普通	底部に厚みがある
-4	B3Gr 6層	土師器 杯	-	5.6	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	褐色	密 石英多く含む	普通	底部に厚みがある
-5	A1Gr 6層	土師器 杯	-	5.6	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	褐色	密 1mm以下の石英多く含む	普通	底部に厚みがある
-6	A2Gr 6層	土師器 杯	-	4.2	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 石英多く含む	普通	底部に厚みがある
-7	C1Gr 6層	土師器 杯	-	5.0	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英多く含む	普通	底部に厚みがある
-8	C1~C2Gr SEC	土師器 杯	-	6.0	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡黄褐色	密 石英・金雲母多く含む	良好	
-9	麦採	土師器 杯	-	5.8	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密	良好	
-10	B1Gr 6層	土師器 杯	-	6.0	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密	やや不良	
-11	B2~B3Gr SEC	土師器 杯	-	6.4	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/糸切り	淡褐色	密 石英・金雲母含む	普通	底部静止糸切りか?
-12	C2Gr 6層	土師器 杯	-	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/糸切り	灰白色	密	良好	ほぼ回転が止まった状態での糸切り
-13	A1Gr 6層	土師器 杯	-	3.0	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒多く含む	やや不良	底径に比して口径が大きくなる
-14	B1Gr 6層	土師器 小皿	7.4	4.6	1.8	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	黒褐色	密 石英含む	良好	
-15	A2Gr 6層	土師器 足高台付杯	-	6.8	-	高台部外方に広がる 外/不明 内/不明	淡黄褐色	密 石英含む	普通	
-16	C2Gr 5層	土師器 足高台付杯	-	7.2	-	高台部外方に広がる 外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡黄褐色	密 石英・雲母を多く含む	普通	

博団 番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
9-17	B2Gr 6層	土器 足高台 付坏	-	10.2	-	高台部外方に広がる 外/回転ナデ 内/回転ナデ	淡褐色	密 石英含む	良好	
-18	B2Gr 6層	製塙土器	約6.0	-	-	外/指頭圧痕あり 内/指頭圧痕あり	外/淡赤褐色 内/燈褐色 断/灰色	密	良好	焼塙土器
-19	C1Gr 6層	製塙土器	約6.2	-	-	外/指頭圧痕あり 内/指頭圧痕あり	外/赤褐色 内/橙褐色 断/灰色	密	良好	焼塙土器
10-1	B1Gr 6層	須恵器 坏	-	6.8	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	灰色	密	普通	
-2	B2Gr 6層	須恵器 坏	-	6.8	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	外/灰色 内/暗灰色	密	良好	外面に一部ハケ
-3	B2Gr 6層	須恵器 高台付坏	-	5.8	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	灰色	密 石英含む	普通	
-4	A2Gr 6層	須恵器 高台付坏	-	7.0	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	灰色	密	良好	
-5	C2Gr	須恵器 高台付坏	-	6.6	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	暗灰色	密	普通	底部に厚みがない
-6	A1Gr 6層	須恵器 高台付坏	-	5.3	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	灰色	密	良好	
-7	B2Gr 6層	須恵器 壺or甕底 部	-	11.0	-	外面底部付近に凹線 が入る 外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/ヘラ切り	暗灰色	密 1mm以下の白 色砂粒多く含 む	普通	
-8	B2Gr 6層	須恵器 壺or甕底 部	-	11.0	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/ヘラ切り	灰色	密	普通	
-9	A3Gr 6層	須恵器 壺or甕底 部	-	14.1	-	外/回転ナデ 内/回転ナデの後ハ ケ 底/ヘラ切り	外/暗灰色 内/灰褐色	密	普通	
-10	C1~C2Gr SEC	須恵器 短頸壺	9.6	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	暗灰色	密 1mm以下の白 色砂粒多く含 む	良好	外面に自然釉がか かる
-11	B3Gr 5層	須恵器 短頸壺	25.7	-	-	口縁部内外面回転ナ デ 頸部下 外/タタキ 内/放射状のタタキ	暗灰色	密 1mm大の白色 砂粒多く含む	良好	
-12	A3Gr 6層	須恵器 壺	-	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 貼り付け突帯一条・ 上部に沈線が入る	暗灰色	密 石英・雲母含 む	良好	

遺構外出土遺物(木製品)

博団 番号	出土地点	製品名	遺存状況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備考	
							側面を面取りしている 板目	狂目
5-4	A1Gr 5層	桶蓋	約3/5欠損	12.0	5.2	1.15		
-5	A1Gr 5層	用途不明	完形	10.1	7.8	1.15		

遺構外出土遺物（古銭・石器）

拂団番号	出土地点	器種	遺存状況	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
7-1	B3Gr (新寛永)	古銭 完形	鉄		2.2	2.2	0.1	1.5	表:「寛永通寶」 裏:「元」
-2	C2Gr (新寛永)	古銭 完形	鉄		2.4	2.4	0.1	2.5	表:「寛永通寶」 裏:無文
-3	A1Gr B1Gr 6層	古銭 一部欠損	鉄		2.5	2.5	0.1	3.0	表:「聖宋元寶」 裏:無文
8-1	D2~D3Gr SEC	砥石 片側欠損	珪長質細粒砂岩	7.2	6.3	3.6	215.3	上面凹む 全面に使用痕あり	
-2	D2~D3Gr SEC	砥石 両端欠損	流紋岩	7.2	6.6	1.9	155.0	全面に使用痕あり 上面に凹状磨痕あり	
-3	C2Gr 6層	砥石 両端欠損	珪長質中粒砂岩	6.0	5.1	2.45	99.5	全面に使用痕あり	

SK01出土遺物（土器）

拂団番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
13-1	B2Gr SK01	土師器 杯	14.6	9.4	5.75	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡黄褐色	密 石英・金雲母 多く含む	良好	回転水引き痕明顯 に残る
-2	B2Gr SK01	土師器 杯	12.0	6.4	4.5	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 石英含む	良好	回転水引き痕明顯 に残る
-3	B1Gr SK01	土師器 杯	11.7	7.2	2.4	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/糸切りの後ナデ による調整	外/褐色 内/淡褐色	密 石英多く含む	良好	回転水引き痕明顯 に残る 外面スス付着
-4	C1Gr SK01	土師器 杯	11.7	5.7	4.2	外/回転ナデ 内/回転ナデ	淡橙褐色	密 石英多く含む	普通	
-5	C1~C2Gr SEC SK01	土師器 杯	16.3	6.0	4.4	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	暗褐色	密 石英・雲母多 く含む	良好	口縁端部外反する
-6	B2Gr SK01	土師器 杯	9.7	4.4	2.75	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	外/淡赤褐色 内/褐色	密 1mmの白色 砂粒多く含む	良好	
-7	C2~C3Gr SEC SK01	土師器 杯	12.1	5.2	2.6	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密	普通	口縁端部や内窪 する
-8	C2Gr SK01	土師器 杯	10.4	4.7	2.3	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 石英・金雲母 含む	普通	口縁端部や外反 する
-9	C2Gr SK01	土師器 足高台 付杯	-	7.0	-	高台部外方に広がる 外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/不明	外/淡褐色 内/褐色	密 石英・雲母多 く含む	良好	
-10	C2Gr SK01	土師器 足高台 付杯	-	8.2	-	高台部外方に広がる 外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	外/淡褐色 内/褐色	普通 雲母含む	普通	
-11	B2Gr SK01	土師器 足高台 付杯	-	8.3	-	高台部外方に広がる 外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/不明	淡緑褐色	やや粗い 白色砂粒・金 雲母含む	良好	
-12	C2Gr SK01	土師器 足高台 付杯	-	7.6	-	高台部外方に広がる 外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 石英含む	良好	
-13	C2Gr SK01	土師器 足高台 付杯	-	8.1	-	高台部外方に広がる 外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	褐色	密 1mm以下の白 色砂粒・石英 多く含む	良好	

擇番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
13-14	C2Gr SK01	土師器 足高台付环	-	8.6	-	高台部外方に広がる 外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/不明	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒多く含む	やや不良	
-15	B1Gr SK01	土師器 足高台付环	-	9.4	-	高台部外方に広がる 外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/不明	外/淡褐色 内/黑色	密 石英非常に多く含む	普通	低い高台を有す
-16	B2Gr SK01	土師器 小皿?	-	4.6	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	褐色	密 1mm以下の白色砂粒含む	普通	
-17	C3Gr SK01	土師器 小皿	6.9	4.3	1.8	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	外/暗褐色 内/黑色	密	良好	
-18	C2Gr SK01	土師器 环	-	5.2	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 1mm大の白色砂粒・雲母含む	やや不良	底部に厚みがある
-19	C1~C3Gr SEC SK01	土師器 环	-	6.0	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒多く含む	不良	底部に厚みがある
-20	C1Gr SK01	土師器 环	-	5.0	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	やや粗い	普通	
14-1	SK01	土師器 环	12.7	6.6	4.4	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英多く含む	良好	墨書き土器 外面スス付着
15-1	C1Gr SK01	土師器 环	-	6.6	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 石英多く含む	良好	底部に厚みがある
-2	B3Gr SK01	土師器 环	-	6.4	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	褐色	密 橙色の砂粒含む	やや不良	底部に厚みがある 15-3と同じ粘土から作る
-3	C2~C3Gr SEC SK01	土師器 环	-	6.4	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	褐色	密 橙色の砂粒含む	やや不良	15-2と同じ粘土から作る 内湾気味に立ち上がる
-4	B2Gr SK01	土師器 环	12.0	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	淡黄褐色	密 橙色砂粒・石英多く含む	普通	回転引き痕明顯に残る
-5	C2Gr SK01	土師器 环or壺	10.6	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	外/黒褐色 内/淡褐色	密 石英含む	良好	口縁端部外反する 外面スス付着
-6	C2~C3Gr SEC SK01	土師器 环	16.6	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	黄灰褐色	密	やや不良	口縁端部や外反する
-7	B3Gr SK01	土師器 环	-	6.0	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母多く含む	やや不良	
-8	C2Gr SK01	土師器 环	-	6.6	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	褐色	やや粗い 石英多く含む 金雲母含む	普通	
-9	B2Gr SK01	土師器 环	-	5.4	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 石英多く含む 金雲母含む	普通	やや内湾ぎみに立ち上がる
-10	B2Gr SK01	土師器 环	-	5.8	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 橙色砂粒・石英多く含む	普通	
-11	C3Gr SK01	土師器 环	-	6.6	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	普通 1mm以下の白色砂粒多く含む	普通	
-12	B2Gr SK01	土師器 环	-	7.8	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/ヘラ切り	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・金雲母含む	普通	

捕団番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
15-13	B2Gr SK01	土師器 杯	-	6.1	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡橙褐色	密	普通	
-14	C2Gr SK01	土師器 杯	-	6.1	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	外/淡褐色 内/褐色	密 石英多く含む	良好	
-15	C2Gr SK01	土師器 杯	-	6.4	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡橙褐色	密	良好	やや内溝ぎみに立ち上がる
-16	C2Gr SK01	土師器 杯	-	5.3	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡褐色	密 石英多く含む	普通	
-17	B2Gr SK01	土師器 杯	-	5.7	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	橙褐色	密 石英多く含む	良好	底部中央薄く作る
-18	B1Gr SK01	土師器 杯	-	5.2	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/回転糸切り	淡橙褐色	密 石英・金雲母 含む	普通	
16-1	C2Gr SK01	土師器 壺	28.4	-	-	口縁端丸くおさめる 頭部下 外/縱方向 内/ケズリ	褐色	粗い 1mm以上の砂粒 非常に多く含む	不良	
-2	C2Gr SK01	土師器 壺	28.0	-	-	外/ナデ 内/横方向のハケ	外/黒褐色 内/褐色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英 多く含む	普通	外面スス付着
-3	B2Gr SK01	土師器 壺	26.6	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 内/ケズリ	褐色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英・ 雲母多く含む	やや不良	内面スス付着
-4	C2Gr SK01	須恵器 杯	13.2	-	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	外/灰色 内/黒色	密	やや不良	回転水引き痕明瞭 に残る
-5	C2~D2Gr SEC SK01	須恵器 高台付杯	-	8.1	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ	暗灰色	密 1mm以下の白色砂粒含む	良好	底部中央薄く作る
-6	B2Gr SK01	須恵器 壺	-	9.5	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/不明	外/暗灰色 内/灰色	密	良好	
-7	B2Gr SK01	須恵器 壺or要底壺	-	6.0	-	外/回転ナデ 内/回転ナデ 底/へら切り?	灰色	密	普通	内面底部に自然釉 がかかる
-8	C2Gr SK01	土師器 内黒土層 杯or壺	23.0	-	-	内外面回転ナデの後 外/横方向のミガキ 内/横方向のミガキ	外/褐色 内/黒色	密 石英多く含む	良好	口縁端部外反する
-9	C2Gr SK01	製塙土器	6.6	-	-	外/指頭圧痕残る 内/指頭圧痕残る	外/橙褐色 内/橙褐色 灰/灰色	密	良好	焼塙土器
-10	C1~C2Gr SEC SK01	土師器 内黒土層 杯or壺	15.2	-	-	内外面回転ナデの後 外/横方向のミガキ 内/横方向のミガキ	外/淡黃褐色 内/黒色	密 石英多く含む	良好	口縁端部外反する
-11	C2Gr SK01	土師器 高杯	-	-	-	外/ナデ 内/ナデ 脚部内面ケズリ	淡褐色	密 砂粒・石英・雲母・ 金雲母非常に多く含む	普通	円盤充填法
-12	B1Gr SK01	弥生土器 壺or鉢	17.5	-	-	外/横方向のミガキ 内/ミガキ 口縁部内外面ともナデ	外/黒褐色 内/黒色	普通 石英多く含む	良好	

SK01出土遺物(石器・土錐)

捕団番号	出土地点	製品名	遺存状況	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
17-1	B2Gr SK01	大型蛤刃 石斧	刃部一部 欠損	玄武岩	12.0	5.1	4.3	400.0	
-2	B2Gr SK01	管状土錐	完形	-	4.0	1.4	1.4	6.0	

SK 01 出土遺物（木製品）

押 団 番 号	出土地点	製 品 名	遺 存 状 況	径 (cm)	高 さ (cm)	厚 み (cm)	備 考
18-1	C2Gr SK01	曲物	底板なし	38.0	14.0	0.7	側板及び木枠に穿4ヵ所あり

SK 02 出土遺物（土器）

押 団 番 号	出土地点	器 種	法 量 (cm)			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	燒 成	備 考
			口 径	底 径	器 高					
20-1	B2～C2Gr SEC SK02	土師器 杯	-	6.8	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／ヘラ切り？	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒・石英・金雲母多く含む	良好	外面スズ付着
-2	B2～C2Gr SEC SK02	土師器 杯	-	6.0	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／ヘラ切り？	明褐色	密 1mm以下の白色砂粒多く含む	普通	外面朱塗り
-3	B2～C2Gr SEC SK02	土師器 杯	-	6.8	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡褐色	普通 石英含む	良好	内湾ぎみに立ち上がる
-4	B2～C2Gr SEC SK02	把手	-	-	-	両側面平坦に作る 貼付部残る	淡褐色	密 雲母・石英多く含む	良好	
-5	B2～C2Gr SEC SK02	製塙土器	6.6	-	-	外／指頭圧痕残る 内／指頭圧痕残る	淡褐色	密	良好	焼塙土器

SK 02 出土遺物（木製品）

押 団 番 号	出土地点	製 品 名	遺 存 状 況	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備 考
21-1	C3Gr SK02	用途不明	片側側面及び上部欠損	39.8	9.0	0.7	征目

SX 01 出土遺物（土器）

押 団 番 号	出土地点	器 種	法 量 (cm)			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	燒 成	備 考
			口 径	底 径	器 高					
24-1	A1Gr SX01	弥生土器 壺	34.8	-	-	外／ナデ 内／ナデ 口縁端部上下に拡張する	淡褐色	密 石英・雲母非常に多く含む	普通	口縁端部に凹線？
-2	A1Gr SX01	弥生土器 壺	13.3	-	-	外／ナデ 内／ナデ 口縁端部上下に拡張する	褐色	密 1mm以下の白色砂粒多く含む	不良	口縁端部に2条の凹線
-3	A2Gr SX01	弥生土器 壺or壺底部	-	7.2	-	外／縱方向のミガキ 内／ナデ	外／赤褐色 内／褐色	密 1mm大の白色砂粒・石英多く含む	普通	

註

- (1)『矢野遺跡第2地点発掘調査報告書』出雲市教育委員会 1991年
- (2)『上長浜貝塚』出雲市教育委員会 1996年
- (3) 渡辺正巳氏に現地で確認していただき、御教示を受けた。
- (4)「神田遺跡」『北松江幹線・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会 1987年
- (5)『中竹矢1号墳・長峯遺跡』松江市教育委員会 1987年
- (6)『古曾志遺跡群発掘調査報告書』島根県教育委員会 1987年
- (7)「天満谷遺跡」『北松江幹線・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会 1987年
- (8)「島根県斐川町西石橋遺跡の中世墓」『古文化談叢 第18集』川原和人・桑原真治 1987年
- (9) 烏谷芳雄氏の御教示による。
- (10)「天神遺跡の諸問題」『古代出雲を考える1』出雲考古学研究会 1979年
- (11)『出雲市埋蔵文化財調査報告書 第6集』出雲市教育委員会 1996年
- (12)『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995年

藤ヶ森遺跡（II地点）

IV. 藤ヶ森遺跡（II地点）の調査

1. 調査の概要

層序（第26図）

II地点は、南北15m、東西15mの225m²を対象に発掘調査を実施した。

JR山陰本線敷設時の盛土を約0.8m除去した後に調査を開始したが、調査区での層序は、部分的にやや異なる様相を示す所もある。しかし、基本的な層序は、盛土の下面是上層から、灰黄褐色土、暗褐色粘質土、オリーブ褐色粘質土、緑黒色粘質土、青灰色粘質土、暗灰色粘質土と堆積しており、この地点の基盤層である灰色粘質土へ達する。なお、灰色粘質土は1.5m以上堆積し、その下面是褐色荒砂層へ達する。

遺構

遺構は、オリーブ褐色粘質土の上面で古墳時代後期の溝状遺構を1条、灰色粘質土の上面で弥生時代のものと考えられる土坑状遺構1を検出している。溝状遺構は調査区を北北西方向に縦断するよう伸び、南北は調査区外にまで達している。土坑状遺構は、調査区の南、A1～A2Grにかけて検出している。また、溝状遺構の周辺で小規模なピットを数穴確認しているが、その他には遺構は確認できなかった。

遺物

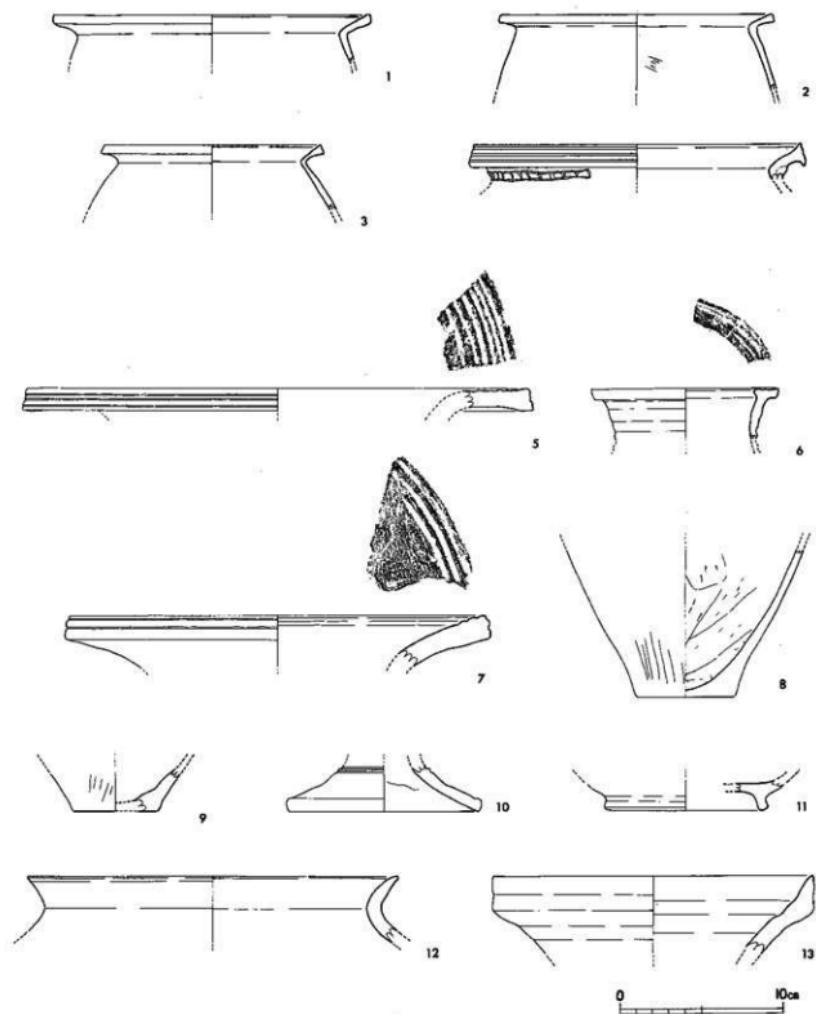
遺物は、盛土以外は灰色粘質土上面に堆積するほとんどの層に包含しており、弥生土器を中心須恵器、中世の陶器などが出土している。中でも、オリーブ褐色粘質土、緑黒色粘質土は弥生土器を中心比較的安定した包含層となっている。しかし、調査区全体での出土量はコンテナ1箱分と少なく、細片が多くかった。また、近世の遺物は認められなかった。

遺構からの出土遺物も少なく、SD01から古墳時代後期の須恵器蓋、坏身が各1点出土しているが、その他は細片が少量出土しているにすぎない。

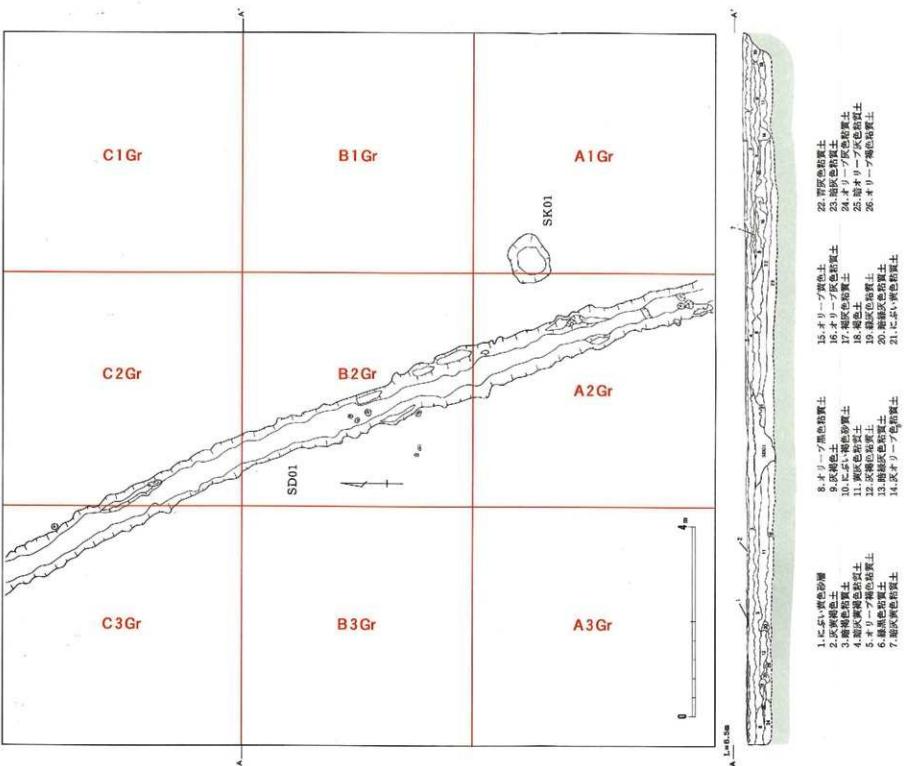
2. 遺構と遺物

遺構外からの出土遺物（第25図）

灰色粘質土上面に堆積しているオリーブ褐色粘質土、緑黒色粘質土を中心に、弥生土器、須恵器、中世陶器などが出土している。



第25図 遺構外出土遺物実測図



第26図 II地点遺構配置図

1～3は、弥生土器の甕の口縁部である。いずれも口縁部が外方に強く屈曲するもので、1・3は口縁端部がやや上部に拡張する。また、全体的に器壁が薄く、3の頸部は、厚さ2.5mmと非常に薄くなっている。以上のような甕は、その特徴から、弥生時代中期中葉頃、松本編年⁽¹⁾III-1からIII-2様式の範疇に入るものと考えられる。

4も甕の口縁部である。口縁部は外方に「く」の字状に屈曲する。口縁端部は上下に拡張し、3条の凹線文を施している。また、頸部には指頭圧痕文帯をめぐらしている。この甕は、上記の甕よりもやや新しく、弥生時代中期後葉～後期前葉、松本編年IV-1様式に相当するものであろう。

5～7は壺の口縁部である。5は、口縁部が大きく外反する。口縁端部は、やや上部に拡張し、3条の凹線文を施しており、内面にも6条の凹線文が入る。6は、小形の壺と考えられ、やや外傾して伸びる長めの口頸部を有するものである。口縁端部は拡張されて上面に平坦面を作り、2条の凹線文が施されている。また、外面口頸部にもナデによって3条以上の凸線を浮き立たせている。7は、大きく外反する口縁部を有し、口縁端部は拡張しない。口縁端部には2条の凹線が施され、内面には3条の凹線文が入る。以上のような壺は、それぞれの形状にやや違いは認められるものの、凹線文が施されるという特徴から、弥生時代中期後葉～後期前葉、松本編年IV-1様式に相当する資料であろう。

8、9は甕の底部である。8は、内面はタテ方向のケズリ、外面はタテ方向のミガキにより調整されている。また、底部中央の厚みが約4.5mmと薄くなっている。これらの特徴から、IV-1様式に相当する資料であろう。9は、内面の調整は不明であるが、外面はタテ方向のミガキにより調整されている。

10は、高杯の脚部であろう。脚端部はやや上部に突出し、外面箇部付近には2条以上の凹線文が施され、内面箇部付近から上方はケズリによる調整が行われているようである。IV-1様式頃に相当する資料であろう。

11は、須恵器の高台付杯、あるいは碗である。高台部は外方に開き、断面はやや丸みを有するが、四角形に近くなっている。奈良～平安期にかけてのものであろう。

12は、須恵器甕の口縁部である。口縁部は外方へゆるく屈曲し、口縁端部は細くなり、丸くおさめている。内外面とも口縁部はナデによる調整がなされているが、頸部下は不明である。

13は、陶器の擂鉢であろうか。底部から口縁部にかけては「ハ」の字状に直線的に開き、口縁部は直立している。その特徴から室町期（14世紀頃）のものと考えられる。

以上のように、I地点では弥生時代中期中葉頃から中世にかけての遺物が出土しているが、量的には弥生土器がほとんどであり、主に弥生時代中期中葉から後期前葉にかけて集落が営まれていたようである。なお、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての遺物、近世の遺物は皆無であったことから、この時期には生活する場とはなり得なかったことが窺える。

SD 01

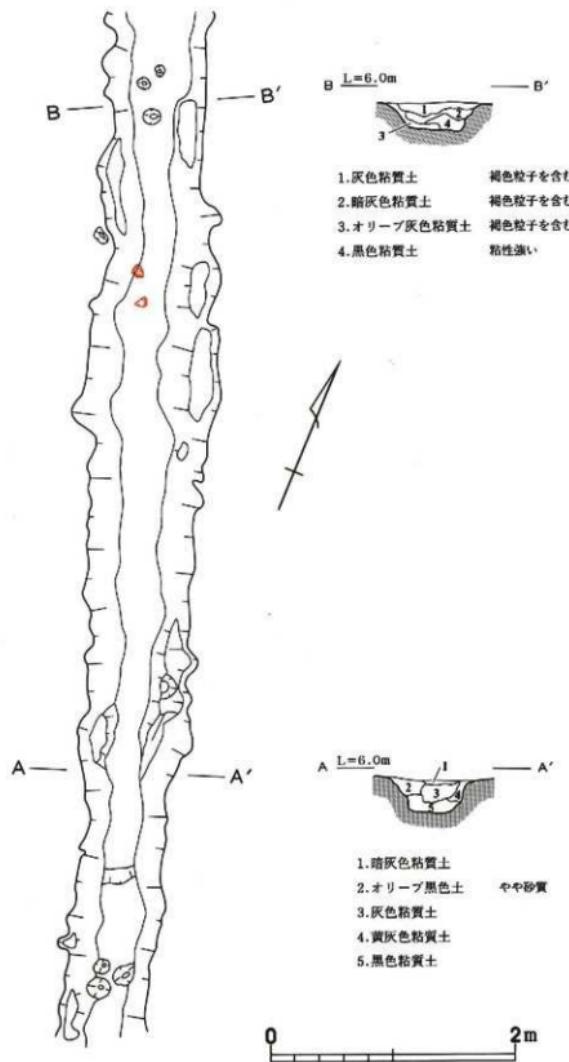
調査区の南側、オリーブ褐色粘質土上面で検出した溝状遺構である。A 2 GrからC 3 Grにかけて、北北西の方向に伸びており、南北は調査区外へとさらに伸びている。

検出長は約16.0m、最大幅1.2m、狭い所では約0.7mを測る。なお、検出高は、標高約5.92mである。

覆土には、上層から暗灰色粘質土、オリーブ褐色土などの粘質土が堆積しており、最下層は一様に粘性が強い黒色粘質土が堆積している。断面の形状は、両肩から約45度の角度で落ち、底面は平坦に作り出しているが、一部には両肩からなだらかに落ち、底面をレンズ状に丸く作りだしている部分もある。最深部までの深さは約30cm、浅い所では約20cmの深さがある。

全体の形状は、B 2 Gr付近で溝の幅が広くなっている。また、A 2～B 2 Grにかけては、深さが約30cmあるのに対し、C 2～C 3 Grにかけては、約20cmと浅くなっている。しかし、底面のレベルは、ほぼ一様に5.65mであることから、C 2～C 3 Grの上面は10cm程度の削平を受けているものと考えられる。

遺物は、B 2 Grの下層から須恵器の蓋、环身が1

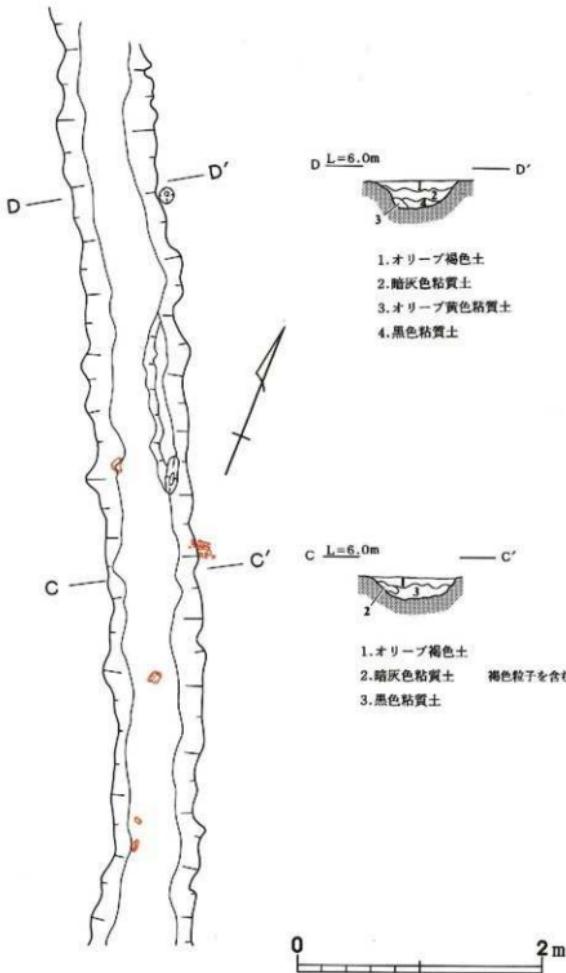


第27図 SD 01 実測図（南側）

点ずつ出土しているが、その他はわずかな細片の須恵器、土師器であり、時期的判断には耐えないものが多い。

この遺構の時期については、出土した須恵器蓋、坏身から、古墳時代後期（7世紀初頭～前葉頃）に築かれたと考えられる。

遺構の性格は、覆土に粘質土が堆積しており、最下層には粘性の強い黒色粘質土が堆積していることから、常に水の流れがあったことが考えられ、水路のような施設であったと考えられる。



第28図 SD 01 実測図（北側）

SD 01 出土遺物（第29図）

1は、須恵器の蓋である。口径12.4cm、器高4.1cmを測り、内外面とも回転ナデにより仕上げられているが、外面天井部はヘラ切り後、ナデ調整が行われている。

2は、須恵器の坏身である。口径12.2cm、器高4.9cmを測り、立ち上がりは短く内傾する。内外面は回転ナデにより仕上げられ、外面底部はヘラ切り後、やや粗雑にナデ調整が行われている。また、この坏身は焼成が悪く、土師器のように淡褐色を呈している。

上記2点の遺物は、その特徴から、7世紀初頭～前葉にかけてのものと考えられ、高広編年⁽²⁾ではII A期に相当する資料であろう。なお、1、2についてはセット関係にはならない。

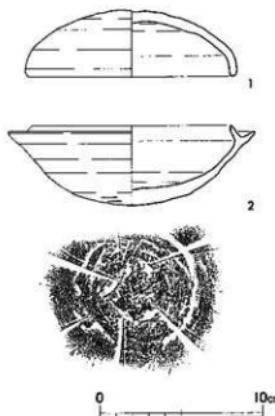
SK 01

調査区の南側、灰色粘質土上面で検出した土坑状遺構で、A1～A2Grにかけて検出している。東西長約1.04m、南北長約0.82m、深さ約0.41mを測り、東西に長い梢円形を呈している。なお、検出高は標高約6.1mである。

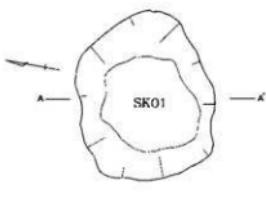
覆土には暗灰色粘質土、灰色粘質土などが堆積しており、最下層にはSD01と同じように粘性の強い黒色粘質土が堆積している。断面の形状は、両肩からやや鋭角に落ちて、底面を平坦に作り出し、逆台形状を呈している。

遺物は、弥生土器片と考えられる細片が1点出土しているのみで、遺構の時期的な判断は難しい。しかし、この遺構の検出高はSD01よりも高くなっているが、層序からみると、1層下面で検出していることから、SD01よりも古い時期に築かれたことが明らかである。また、付近に堆積する包含層中には弥生土器が多く出土しているうえ、遺構内から出土した土器が弥生土器と考えられることから、弥生時代の遺構である可能性が強い。

遺構の性格については、形状、出土遺物からは判断できず、不明である。



第29図 SD 01 出土遺物実測図



第30図 SK 01 実測図

3. 小 結

(1) 遺 構

II地点では、弥生時代のものと考えられる土坑状遺構を1、古墳時代後期の溝状遺構1を検出した。数少ない遺構であるが、この地域で当該期に集落が営まれていたことを示す、貴重な資料を得ることができた。

SD01については、調査区外のさらに南北方向へと伸びていくことを考えても、遺跡の範囲はさらに広くなる可能性を示している。

(2) 遺 物

遺物は、遺構外からの出土が多いが、弥生土器が最も多く、その他では須恵器、陶器などが少量出土している。

弥生土器には、その特徴から、弥生時代中期中葉から後期前葉にかけてのものが出土しており、この時期をもって遺跡が営まれ始めたと考えられる。しかし、弥生時代終末期から古墳時代中期にかけての出土遺物は全くなく、この時期は生活の場とはなっていなかったようである。そして、SD01から出土している古墳時代後期の遺物以降も、再び遺物がほとんど認められないことから、古代～中世にかけても生活の場としては機能していないかったと考えられる。

また、II地点については、平成6年度に発掘調査を実施し、南西100mの地域に広がる善行寺遺跡⁽³⁾との関連が指摘される。善行寺遺跡では、弥生時代後期頃から奈良時代にかけての遺構、遺物を多く検出しており、II地点とは弥生時代後期について一時期重なる部分がある。しかし、弥生時代中期中葉の遺物は、善行寺遺跡では確認されていないことなど、時期的に異なる点も多い。調査範囲も限られたものであるため、判断し難いが、今後、2つの遺跡の関連や早くから宅地化されている出雲市街地での埋蔵文化財の有無について、注視していく必要があろう。

註

- (1)『弥生土器の様式と編年 山陰・山陽編』 正岡勝夫・松本岩雄編 木耳社 1992年
- (2)『高広遺跡発掘調査報告書』 島根県教育委員会 1984年
- (3)『出雲市埋蔵文化財調査報告書 第7集』 出雲市教育委員会 1997年

V. 総括

本書では、平成7年度に発掘調査を実施した藤ヶ森遺跡（I地点・II地点）について、遺構や遺物などを通してその時期について検討してきたわけであるが、ここでは、どの時期に遺構が築かれ、集落が営まれていたかを、それぞれ時期別にまとめることにする。

藤ヶ森遺跡（I 地点）

I 期（弥生時代前期末～後期前葉）

この地域に遺跡が形成された時にあたり、遺構としては、弥生時代中期中葉頃の遺物が出土しているSX01が該当する。また、弥生時代前期末の遺物と考えられる土器や磨製蛤刃石斧が出土していることから、この地域周辺に弥生時代前期末から集落が営まれていたことが窺える。

II 期（古墳時代～奈良時代）

SD01・SD02が築かれた時期にあたると考えられるが、この遺構からは遺物が出土しておらず、断定できない。しかし、包含層中やSK01から出土している遺物の中には、当該期のものが含まれていることから、この時期にも集落が存在していたと考えられる。

なお、I期とII期の間にはかなりの隔たりがあるが、この間の遺構・遺物は確認されておらず、生活の場とはなっていなかったと考えられる。

III 期（平安時代～鎌倉時代初期）

SK01・SK02が築かれた時期で、遺物の出土量から考えてもこの地域が最も繁栄した時期である。中でも10世紀前後の墨書き土器が出土していることから、官衙的施設なども想定される。なお、SK01については10世紀前後に築かれ、12世紀頃まで機能していたと考えられる。

藤ヶ森遺跡（II 地点）

I 期（弥生時代中期中葉～後期前葉）

包含層中からは、最も古い遺物としてこの時期のものが出土していることから、この地域に遺跡が形成された時にあたる。遺構としては、SK01が当該期のものと考えられる。

II 期（古墳時代後期）

全体としての遺物出土量は少ないが、SD01から7世紀初頭～前葉の遺物が検出されており、この時期に当該地に集落が営まれていたことを示している。

なお、I地点と同様にI期とII期にはかなりの隔たりがあるが、この間には遺物も検出されていないことから、生活の場としては利用されなかったと考えられる。

出土遺物観察表

造構外出土遺物（土器）

揮番号	出土地点	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
25-1	A3Gr	弥生土器 甕	19.4	-	-	外／ナデ 内／ナデ 口縁端部上下に少し 拡張する	淡褐色	密 石英・雲母含む	普通	
-2	B3Gr	弥生土器 甕	16.6	-	-	外／ナデ 内／ナデ、頭部下ハ ケ、口縁端部平坦面 を作る	淡黃褐色	普通 1mm以下の白 色砂粒を多く 含む	やや不良	
-3	C3Gr	弥生土器 甕	13.2	-	-	外／ナデ 内／ナデ 口縁端部上下に拡張 する	外／淡黃褐色 内／淡褐色	普通 金雲母含む	普通	頭部非常に薄い、
-4	A3Gr	弥生土器 甕	20.0	-	-	外／ナデ 頭部に指頭圧痕文帯 貼付ける 内／ナデ	黃褐色	密 1mm以下の白 色砂粒・石英・ 雲母を多く含む	良好	口縁端部上下に拡 張し、3条の凹線 が入る
-5	B1Gr	弥生土器 壺	30.8	-	-	口縁端部上部に拡張 する 外／ナデ 内／ナデ	淡黃褐色	密 1mm以下の白 色砂粒を多く含む	普通	口縁端部に3条の 凹線、内面に6条 の凹線が入る
-6	A3Gr	弥生土器 甕	11.4	-	-	口縁部水平方向に突 出し、上部に拡張す る 外／ナデ 内／ナデ	淡黃褐色	密 石英・雲母多 く含む	普通	外面ナデにより3 条以上の突起を作 る。口縁端部上面 に2条の凹線が入 る
-7	C3～C4Gr SEC	弥生土器 壺	25.4	-	-	口縁部外反する 外／ナデ 内／ナデ	黃褐色	密 1mmの大白色 砂粒・石英を 多く含む	良好	口縁端部に2条の 凹線、内面に3条 の凹線が入る
-8	A1Gr	弥生土器 壺or甕底部	-	6.0	-	外／縱方向のミガキ 内／横方向のケズリ 底部付近に指頭圧痕 残る	外／褐色 内／淡褐色	密 1mm以下の白 色砂粒含む	やや不良	
-9	A3Gr	弥生土器 壺or甕底部	-	5.2	-	外／縱方向のミガキ 内／不明	外／褐色 内／淡褐色	密 1mm以下の白 色砂粒・石英 含む	普通	
-10	B3Gr	弥生土器 高壺	-	11.6	-	外／ナデ 内／ナデ、筒部付近 より上ケズリ？	淡褐色	密 1mm以下の白 色砂粒多く含 む	普通	外面に2条以上の 凹線が入る
-11	C3Gr	須恵器 高台付壺	-	9.0	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ	外／灰色 内／淡赤褐色	密	普通	
-12	A3Gr	須恵器 甕	22.6	-	-	口縁端部外反する 外／回転ナデ 内／回転ナデ	外／暗灰色 内／褐色	密	普通	内外面に自然釉が かかる
-13	B3Gr	擂鉢	19.6	-	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ 口縁部造「く」の字 に屈曲する	外／赤褐色 内／淡赤褐色	密 1～2mmの大 白色砂粒を含 む	普通	

SD01 出土遺物（土器）

捕団番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
29-1	B2Gr SD01	須恵器 蓋	12.4	—	4.1	外／回転ナデ 上部ヘラ切り後ナデ 内／回転ナデ	外／暗灰色 内／灰色	密	良好	
-2	B2Gr SD01	須恵器 杯	12.2	—	4.9	外／回転ナデ 内／回転ナデ、底部 付近に一部ハケ 底／ヘラ切り後ナデ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒を含む	不良	

考 察

藤ヶ森遺跡（I 地点）における¹⁴C年代

川崎地質株式会社

はじめに

藤ヶ森遺跡は島根県出雲市を中心部、南本町地内に立地する遺跡である。同遺跡では発掘調査に伴い腐植質粘土を充填する「地山：灰白色粗砂」の落ち込み（SX01）が検出された。出雲市中心部では縄文時代早期以降、神戸川あるいは斐伊川による地形変化が頻繁に起こったと考えられ、今回検出された落ち込みの形成期を明らかにすることが、地形発達史解明の糸口になると予想された。

本報は、「地山」を充填する腐植質粘土の堆積年代を明らかにし、出雲平野の地形発達史解明の資料とするために測定した¹⁴C年代について述べたものである。

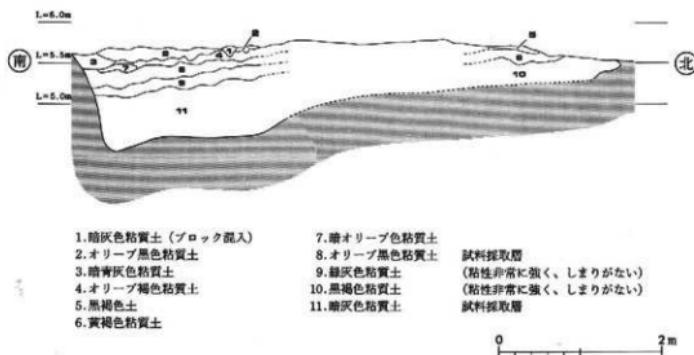
試料および測定方法

測定用試料は出雲市教育委員会により、図1に示す断面図の11層で試料No.1が、8層で試料No.2が採取された。

¹⁴C年代測定は気体比例計数管により測定し、半減期5568年として計算を行った。

測定結果

測定結果を表1に示す。それぞれの中央値を西暦に単純計算すると、試料No.1がBC1280年、試料No.2がBC1200年となる。



第31図 試料採取層準

表1 ^{14}C 年代測定結果

試料番号	測定年代 (y.B.P.)	測定番号
1	3230±120	I-18468
2	3150±120	I-18469

測定値の評価

今回得られた値はともに誤差範囲に含まれ、ほぼ同時代（繩文時代後期）を示すと考えられる。これに対し、試料No.2の採取層準である8層からは、僅かではあるが弥生時代前期～中期の遺物が検出され、測定値と矛盾する。

測定値がおかしいと仮定すると、原因の一つに試料の汚染が考えられる。測定試料の汚染原因として水やカビなどの影響が考えられるが、これらは測定値を若くするのが一般的である。また腐植土を対象としたことから、二次的な腐植物が堆積物中に濃縮していた可能性もある。この場合、測定値が古くなる可能性が指摘できる。微量な試料を用いるAMS方による測定の場合、二次堆積物により測定年代が古く測定されるような例が度々見られるが、処理重量の多い気体比例計数管を用いる場合には、このようなことは起こりにくい。

一方、8層上位の2～4、7層からは奈良～平安時代の遺物が検出され、8層上面が不整合面であると推定される。8層より下位からの出土遺物の量は極めて少なく、しかも不整合面直下の8層に遺物が集中する。したがって得られた年代が正しく、検出された遺物が不整合形成時に8層へ混入した可能性もある。

藤ヶ森遺跡の墨書土器について

平石 充

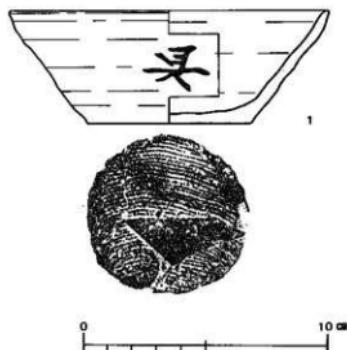
体部外面に正位で「具」の墨書がある。上下に続く墨痕はない。其あるいは具の文字を含む墨書土器には以下の類例がある。

出土遺跡	訛文	種類	器形	墨書部位	出土遺構	年代	備考	文献
島根県・藤ヶ森遺跡	具	土師器	壺	体部外面・正位	井戸	10世紀前後		
茨城県・鹿の子C遺跡	具	須恵器	蓋	頂部内面	堅穴住居跡			①
	具・□・具	須恵器	壺	底部	溝			
茨城県・今城遺跡	是□□具	土師器	台付皿	体部				②
千葉県・仁井宿東遺跡	大万具	土師器	壺	底部外面	井戸	9世紀前半		③

①『茨城県関係古代金石文資料集成 一 墨書・梵書一』茨城県立歴史館 1985年

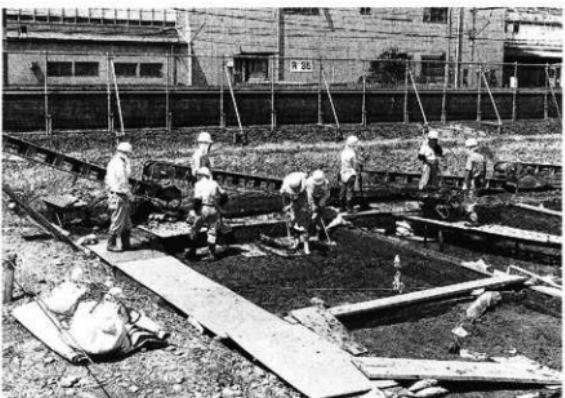
②『茨城県関係古代金石文資料集成 一 墨書・梵書一』茨城県立歴史館 1985年

③『仁井宿東・牧野谷中田遺跡』千葉県文化財センター 1985年



第32図 墨書土器実測図

図 版
(I 地点)



図版 2



SK01 遺物出土状況（中層）



SK01 土層断面（南北）



SK01 遺物出土状況（下層）



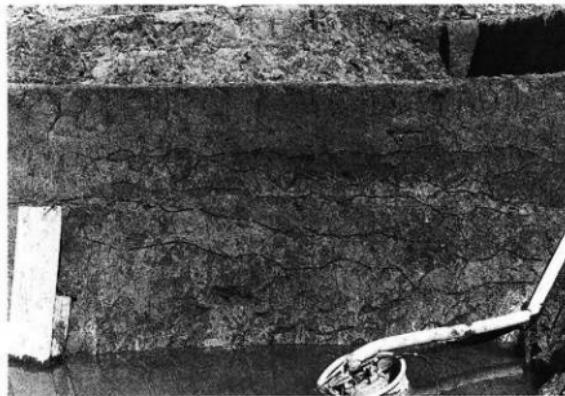
图版 4



SK02 遗物出土状况



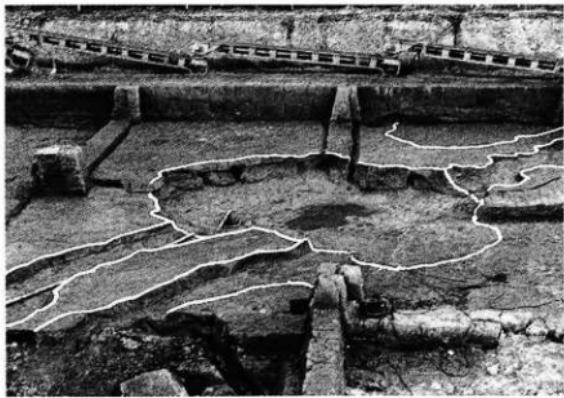
SK02 完掘状况



SX01 土層断面



I 地点遺構検出状況
(北から撮影)

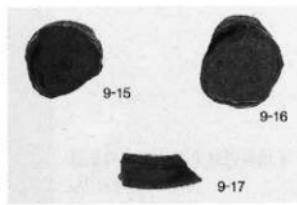
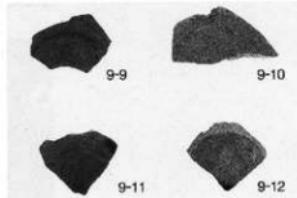
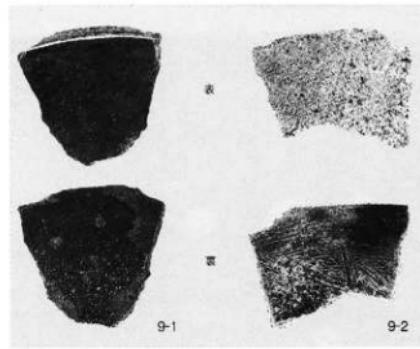
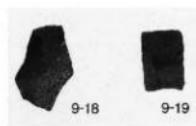
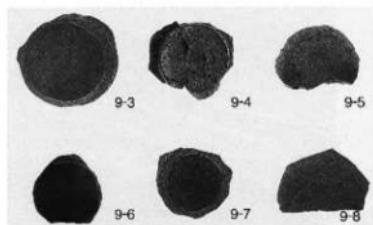
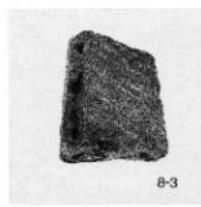
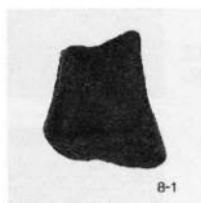
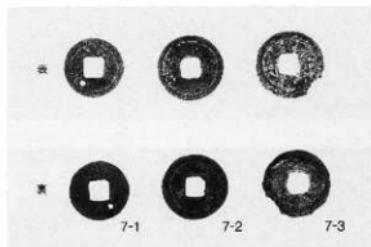
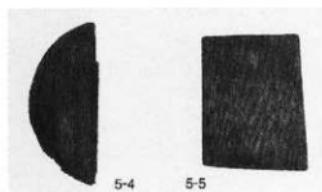
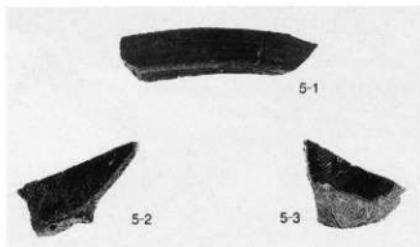


I 地点遺構検出状況
(南から撮影)



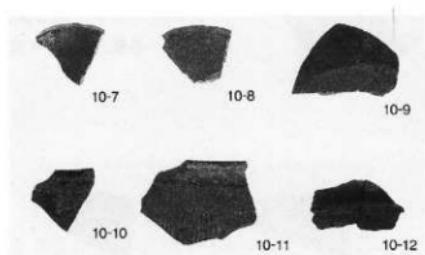
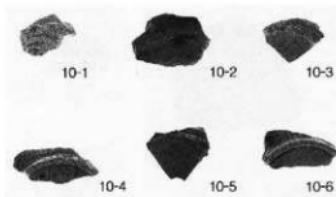
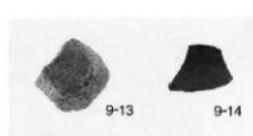
I 地点付近工事中出土の貝殻
(掘削深15m以上)

図版 6

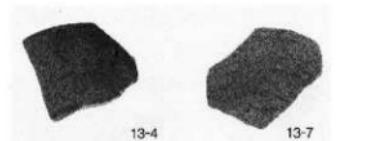


遺構外出土遺物

圖版 7

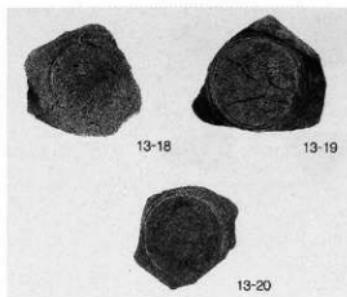


遺構外出土遺物

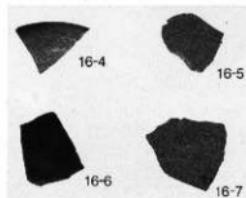
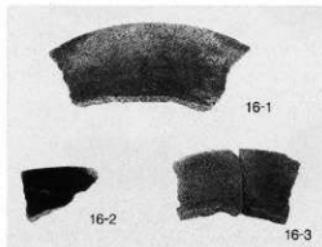
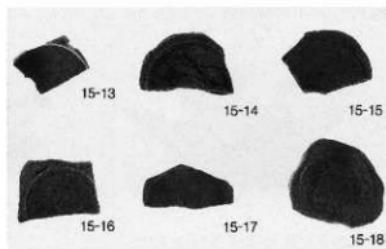
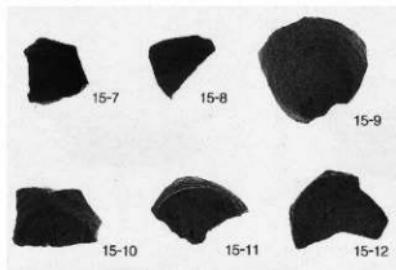
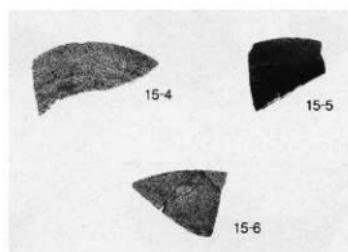
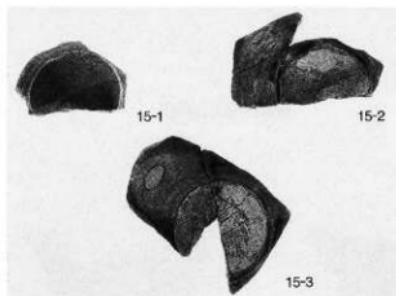


SK 01 出土遺物

図版 8



墨書土器 X線写真



SK 01 出土遺物

図版 9

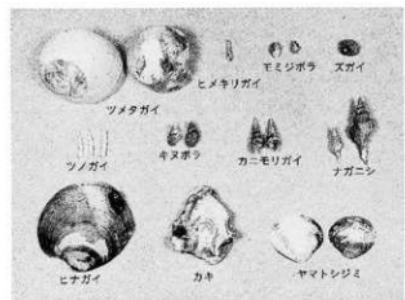
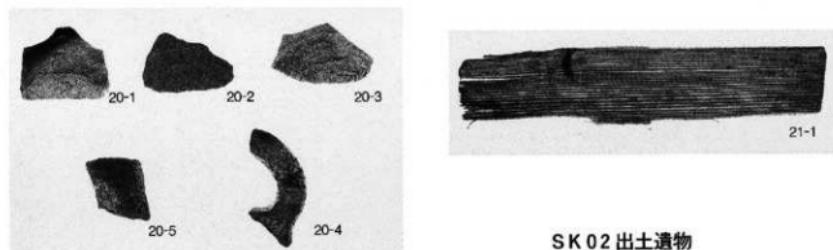
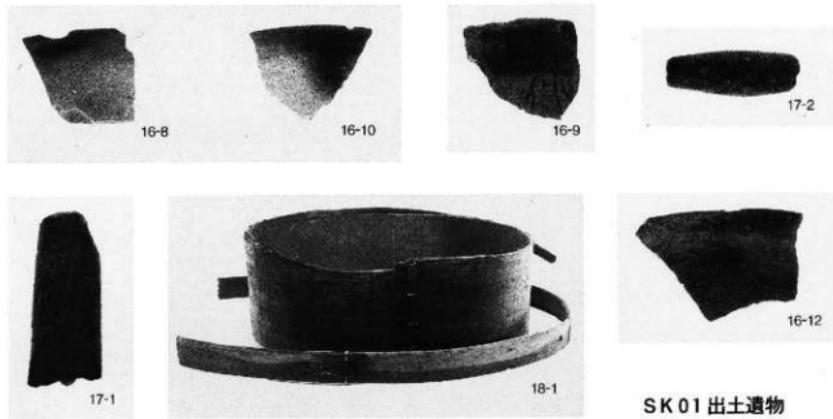
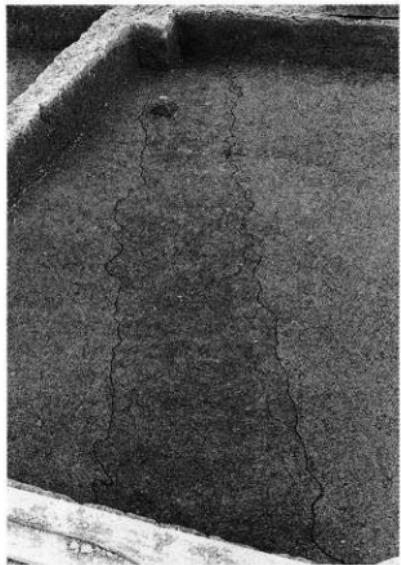


圖 版

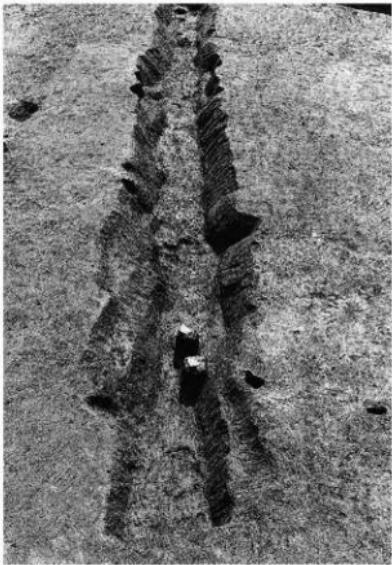
(II 地點)



調査風景（II地点）

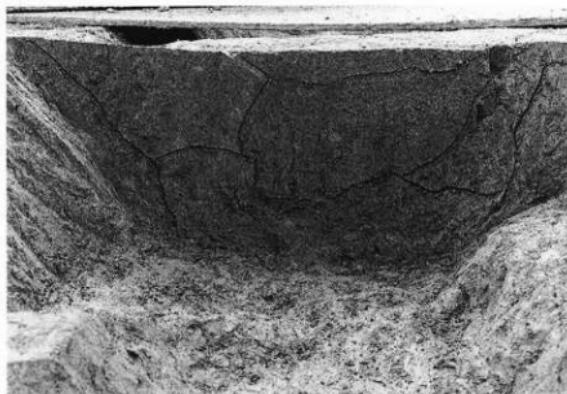


SD01検出状況

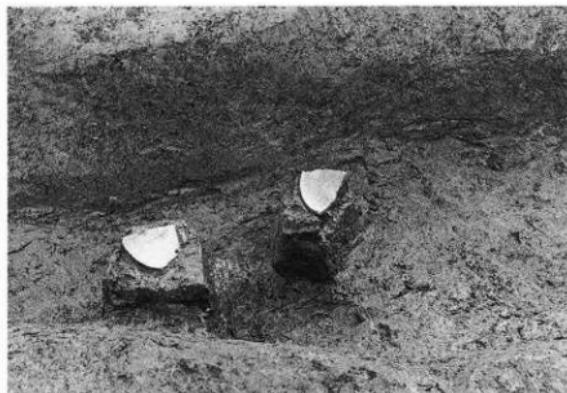


SD01完掘状況

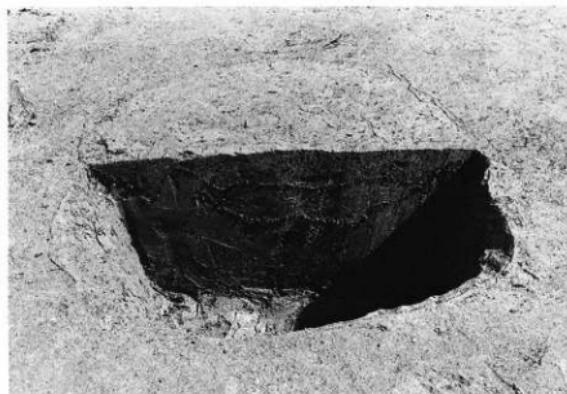
図版11



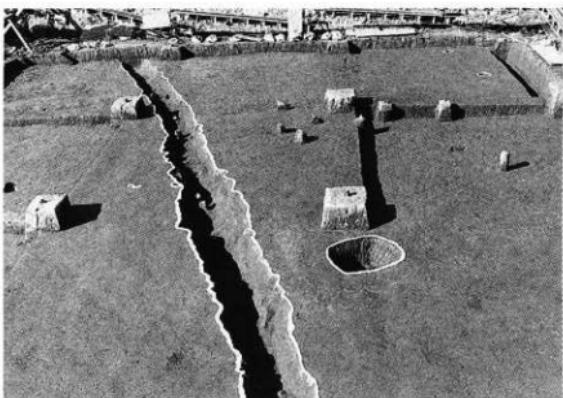
SD 01 土層断面



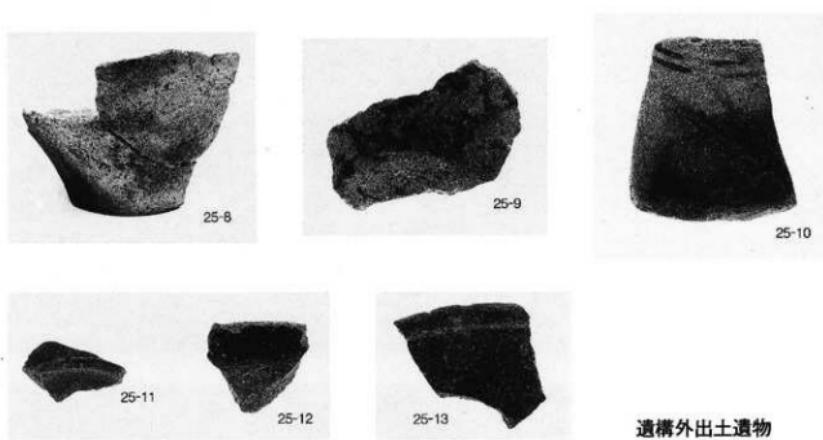
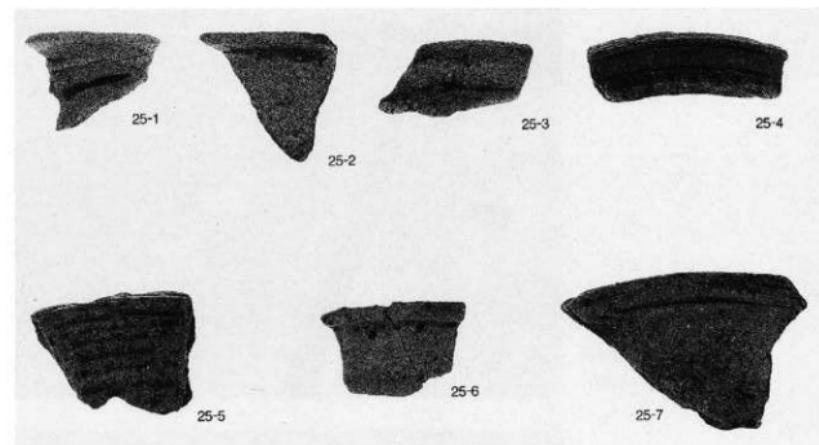
SD 01 遺物出土状況



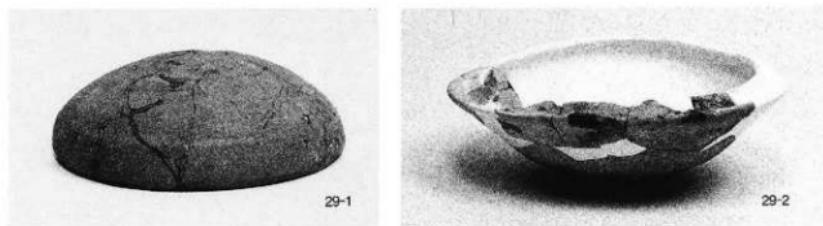
SK 01 土層断面



図版13



遺構外出土遺物



SD 01 出土遺物

JR山陰本線・私鉄一畠電鉄連続立体交差事業地内
藤ヶ森遺跡（I地点・II地点）発掘調査報告書

平成10年（1998）3月

編集・発行 出雲市教育委員会
出雲市今市町北木町3丁目1-6

印刷・製本（有）ナガサコ印刷
出雲市下横町350